

明代留京チベット仏教僧序論

乙坂智子

はじめに

第一節 研究状況

(一) 対チベット政策の副産物

(二) 君主の愛好

(三) 宦官との関係

(四) 時期区分

第二節 課題と方法

(一) 課題

(1) 「英明」から「腐化」へ——なぜ、そう見えるのか

(2) 「表1」「表2」は、事実を反映しているのか

(3) では、なぜ実録に「表1」「表2」のようなかたちで勅命記事が採録されているのか

(4) 君主独裁体制下の君主と官僚

(二) 方法

(1) 「表1」・「表2」

(2) 『明英宗実録』と『明憲宗実録』

おわりに

謝辞

注

〈表1〉各実録に採録された個々の留京チベット仏教僧に関する勅命記事

〈表2〉各実録に採録された個々の留京チベット仏教僧に関する勅命記事…集計

文献表

はじめに

明はその成祖永楽年間、チベットからカルマ派のテシンシェクパ De bzhin gshegs pa を応天府に招いて盛大な国家仏事を挙行すると、これを題材として、内閣や翰林院に所属するエリート文人官僚たちによる文書や御製文書を発出した。これらの文書は一貫して、この「異端」「外夷」による仏事においてさえ正統的な、すなわち儒教的な瑞祥が発生し、以て成祖の超越的かつ普遍的な神聖性が示されたとした。これによって成祖の統治権正当性が証明された、と主張するためである。武力を以て登位した皇帝を戴くという、いわば非常事態下の政権であるがゆえに、君主と官僚とが一体となり、このような政治的文書工作に出たと考えられる。⁽¹⁾

しかし仁宗代以降、成祖代を特徴づけたこうした動向はもはや見られなくなる。仁宗から武宗までの君主は基本的に前代皇帝の子であり、登極に大きな問題がなかった。代宗登位と英宗復位とが例外と言えば例外であるが、それとて内戦をともなうようなものではない。したがって仁宗のち、当該君主の統治権正当性を強く主張する必要は成祖代に比較すれば薄弱であり、そのため成祖政権がおこなったような工作が必須とはされなくなったものである。そうであるならば、チベット仏教僧は成祖代において負わされたこの役割を終え、他の「外夷」と同じく、ただ朝貢・回賜を繰り返すのみの存在となってもおかしくはなかったはずである。

在位がわずか足かけ二年でしかなかった仁宗代のチベット仏教僧の消息はほとんど伝わらない。ところが次代の宣宗代から武宗代にかけての時期、チベット仏教僧は成祖代とはまた別のかたちで明の内部において小さからぬ足跡を残すこととなった。京師、すなわち永楽十九年（一四二一）に遷都⁽²⁾された順天府の仏寺——後掲〈表1〉に見るように、主として隆善護国寺・慈恩寺・能仁寺の三寺院——にかなりの数のチベット仏教僧が国費に支えられ

て「分住」^③し、しばしば官僚たちから反発の上奏がなされるほどの集団を形成したのである。その後、帝統が変換した世宗の即位を機に、この集団は解体された。つまり、成祖の帝統につながる諸帝の時代において、チベット仏教僧の大量留京という現象が出来たわけである。

彼らのうちの一部の僧侶は、チベットへの使者として尽力するなど、対外政策上の役割を担った。しかし大多数の僧侶たちは、光祿寺から配当される扶持と役夫に依存しつつ、あくまでも仏教僧として順天府の仏寺に在留していた。もちろん、万寿聖節など、そのときどきに仏事をおこない、国家安寧を祈願する宗教者としての役割を果たす者もいた。^④と言つてそれも、テシンシエクパのごとく大々的な国家仏事の導師を勤めて儒家官僚たちの文書に肯定的に記される、といった明らかに政治的な用いられたをしたわけではなかった。

したがって当然のことながら、この集団を国家が養っていることに対して官僚たちが異を唱え、機会あるごとに彼らの送還を奏上した。しかし不可解なことに、こうした官僚たちの抗議にもかかわらず、当該期の皇帝たちは彼ら留京チベット仏教僧を排除することに概して消極的であった。

では、それはいったいなぜだったのか。明の君主が彼らを愛顧することは儒教イデオロギーに反することであつて、本来あるべき事態ではない。いかに言いつくろつても、それはその君主の失点にほかならない。事実、官僚たちが単に国費の浪費のみを効奏しているわけではなく、仏教という「異端」を厚遇していることをも非難していたことは、本稿続編において見ることになるだろう。しかしこうした官僚側の諫言にもかかわらず、君主たちは「異端」である京師滞在のチベット仏教僧たちを護持し続けた。なぜこのような状態が、宣宗代から武宗代にかけて継続したのか。

筆者はこの問題に関連して、一九九八年提出の日本学術振興会特別研究員報告書のなかで言及したことがある。^⑤

しかしそれは、ある特定の型の実録記事（後掲〈表1〉所掲記事のたぐい）がそのまま「事実」を反映しているはずであるという楽観的な前提にもとづいたものであり、考察の方向性そのものを見誤っている。そこで今回、あらためてこの題材に取りくむこととした。

第一節 研究状況

（一）対チベット政策の副産物

近年の研究のうちまず注目すべきは、沈衛榮の所論⁶⁾である。たとえば成化二十一年（一四八五）時点で隆善護国寺・慈恩寺・能仁寺のみでも「番僧」の数は千余人にのぼるなど、「内地」で活動していたチベット仏教僧は元代よりも明代のほうがはるかに多かったであろうとして、その盛況ぶりを諸種の史料から詳細に示している。この状況に対して官僚たちがしばしば苦言を呈したが、「番僧」は祖宗の時代にすでにいた、遣還すれば遠人の心を失う、などとして、おおむねこれらの建議が功を奏さなかったことも指摘される。そしてその理由について沈衛榮は、一面においては皇帝自身がチベット仏教に惹かれていたためとしつつも、いま一つの面においては「遠夷」を「懷柔」するという対外政策的な目的があったとした。いわば、朝貢・回賜という対チベット政策の延長線上にこの現象を差し戻すかたちで、チベット仏教僧の京師在留を政治的なものとして説明しようとしたわけである。そのうえで、結果的に明はチベットに対して本格的な武力行使に至ることなく終始し、よって「遠夷」に対する「懷柔」策として留京チベット仏教僧厚遇は政策的役割を果たした、と結論づけた。

だが、もしも「遠夷」を「懷柔」するという目的であれば、むしろ称号や莫大な回賜を与えたうえで使節団一行

をそのまま故郷に帰還させるほうが、個々の僧侶に京師での長期在留を許可するよりも実効性が高いのではない。裏をかえせば、かりに京師滞在が許されなかったとしても、それがチベットとの軍事衝突につながったと考えることには、いささか飛躍がともなう。実際、明はチベットにおいて三法王・五王を冊立し、それを襲替させていく体制を築くことによって、平和裡に関係を維持しつづけていた。^⑦つまり、対チベット政策は、別途、堅調に運営していたのである。

しかし留京チベット僧の問題を対チベット政策の一環として説明しようとする動向は、他にも認められる。たとえば熊文彬^⑧もまた、太祖代や成祖代はもちろん、たとえば憲宗代の慈恩寺所属僧ゲレクリンチェン dGe legs rin chen や、武宗代の能仁寺所属僧ソナムトントップ bSod nams don grub など、明代中盤の留京チベット仏教僧を具体的事例として挙げながら、彼らがチベット地域との間の使節として往来したことを指摘し、留京チベット仏教僧が対チベット政策に寄与していたことを明らかにした。たしかに、こうした功績は見のがすべきではない。しかし、主要三寺院のみでも千余人にのぼったという留京チベット仏教僧の規模からすれば、こうした事跡は、彼らのなかのごく一部が果たしたにすぎないことになる。そうであるとすれば、そのときどきある程度の員数が確保できればこと足りるはずの使節団派遣のために、常時、千余人規模の留京チベット仏教僧を国家が養わねばならない必然性を見いだしにくい。

以上のように、対チベット政策から、京師の大規模な留京チベット仏教僧集団を政権が支え続けた理由を説明することは困難である。

(二) 君主の愛好

その点、最も一般的であり、なおかつ自然である説明は、君主がチベット仏教を気に入っていたから、という素朴な理由づけである。案外、解答はこれで済んでしまうのではないかとさえ思われるほどである。

早くは佐藤長が、宣宗は温厚な君子であったためチベット仏教僧に対して寛容であり、続く英宗・憲宗・孝宗・武宗の時代はいずれの皇帝もチベット仏教僧を寵愛したとした。⁽⁹⁾近年においても、たとえば杜常順⁽¹⁰⁾が、成祖・宣宗の段階から皇帝が一貫してチベット仏教を厚く礼遇したことを述べ、とくに英宗・代宗・憲宗・孝宗・武宗に至っては全員が崇仏的皇帝であったとして、留京チベット仏教僧の盛況を皇帝の愛好に帰している。このうち、宣宗のチベット仏教愛好については従来さして注目されていなかったが、才讓⁽¹¹⁾の報告によつて、この皇帝もその後の皇帝たちと同様にチベット仏教を深く尊崇したことが明らかになった。このように宣宗から武宗までの諸帝がひとしなみにチベット仏教を愛好している以上、まずこのことが留京チベット仏教僧隆盛の基盤であることは、なるほど動かしがたいだろう。

趙改萍⁽¹²⁾もまた、皇帝のチベット仏教尊崇を留京チベット仏教僧隆盛の主要要因の一つとする。なおかつ、なぜ皇帝がチベット仏教を愛好したかについても言及しており、とくにチベット仏教特有の密教的要素が諸帝を引きつけたとして、ここに注目している。たとえば、中国の仏教では止観についての体系が整っていなかったのに対して、チベット仏教がこれを補うことができたことなどを趙改萍は挙げる。チベット仏教の高度に洗練された教学や修法を理解し、実践した皇帝がいたとすれば興味ぶかい。ただし、どの皇帝がどの師についていかなる教学・修法を学んだかに関して、より具体的な事例が示されているわけではない。

最近の熊文彬⁽¹³⁾の著作も、明の皇帝の少なからぬ者がチベット仏教に深く興味を抱き、とくに憲宗と武宗は「沈溺」したとしている。憲宗・武宗の旺盛なチベット仏教崇奉は、いずれの研究者によつても是認されているが、熊

文彬もまたその賛同者の一人であると言える。この見解をとることが、ほぼ現時点での標準となっていることを示しているだろう。

憲宗・武宗のうち、とくに武宗のチベット仏教愛好に関しては、佐藤長を嚆矢として、ある程度の分量の論考が蓄積されている⁽¹⁴⁾。武宗自身、リンチェンペルデン Rin chen dpal ldan なるチベット名を名乗るばかりか、自分自身を「大慶法王」に任じてしまったほどであるため、それもゆえなしとしない。加えて、この武宗が亡くなるや、一気にチベット仏教僧が順天府から追われることとなり、以後、それまでの盛様をとりもどすことがなかったため、彼らが最後の栄耀を誇った武宗代は注目されることとなったものであろう。また武宗の場合、ごく単純に、君主がチベット仏教を愛好したから、という説明が比較的成り立ちやすいことが特徴と言える。とはいえ、儒教イデオロギー国家の君主がチベット仏教に耽溺するあまり「法王」にまでなってしまった、という異常さを、ただ彼個人の宗教上の嗜好のみで理解できるわけではない。

(三) 宦官との関係

このように少なからぬ明帝がチベット仏教尊崇に走ったことの背後に、宦官の存在を指摘する議論は少なくない。いち早く、これもまた佐藤長が、宦官とチベット仏教僧とが「親しい関係をもったことは容易に想像できる」とし、明廷におけるチベット仏教盛行は「宦官政治の一つの表れと見てよいであろう」との見通しを述べている⁽¹⁵⁾。皇帝側近に位置する宦官たちが、寵を争ってチベット仏教僧を君側から排除するなどということなく、逆に利害を共有する動きをとっていたとすれば、宦官勢力の強大化という明の特質と合わせて、重視すべき問題である。

この問題については、そののち杜常順⁽¹⁶⁾が体系的に取り組んだ。たとえば英宗正統年間、勅命により京師の寺院

でチベット仏教僧に仏事をおこなわせた際に、司礼監の宦官がこれを督率した事例などを紹介し、宦官とチベット仏教僧とがつながるルートの一つがこうした勅修仏事であったことを明らかにした。いま一つのルートとしては、番經廠が内廷にあり、宦官がここで任用されて仏事の訓練を受けていたことを挙げている。実際、その仏事においては宦官がチベット仏教僧に扮して儀礼をおこない、司礼監・内官監・司設監など複数の宦官衙門が協同してこれに当たったというから、番經廠が宦官とチベット仏教との結節点として機能していたことは疑いない。これらの点から、チベット仏教僧が皇帝に接近するための仲介役を宦官が果たし、諸帝の「沈溺」を助長した、と杜常順は言う。加えて杜常順は、より個人的な事例にも言及している。たとえば宦官王瑾が、代宗によって大智法王とされるベルデンタシー dpal ldan bka' shis の敬虔な信徒であり、早くも宣徳年間には、この王瑾にタシートントゥブ bKra shis don grub なる藏語法名が授けられていたことなどを指摘している。

また何孝榮は、明代の宦官と仏教一般との密接な関係を取りあげた論考のなかで、チベット仏教と宦官との関係にも言及している。たとえば、憲宗代に大応法王タシーベル bKra shis dpal が示寂した際には宦官が造寺建塔を請願した⁽¹⁷⁾ことや、武宗のチベット仏教僧尊信に宦官の「誘引」があつたとして武宗死後に糾弾がなされたことが⁽¹⁸⁾特筆されている。

以上のように、佐藤長の予見に間違いのなかったことが実証されてきた。そしてこのことは、ある時期の君主たちが京師のチベット仏教僧たちを愛顧したというときの、実際の経緯ないし構図を示すものでもある。とはいえないかに宦官たちが「誘引」したからといって、そのみで崇仏君主たちが崇仏であったことの理由として充分であるわけではない。宦官は君主の意を汲む存在であつたから、まずは君主のほうに崇仏的傾向がなければ、仲介も誘引もありえないからである。

(四) 時期区分

これまで見てきたように、留京チベット仏教僧の盛様は、ひとまず君主による愛好の結果であることが少なからぬ研究者によって認められている。したがって、明代の留京チベット仏教僧の盛衰を朝代ごとに時期区分しようとする試みがなされたことはとくにあやしむに足りない。

たとえば何孝榮⁽¹⁹⁾は、明代を三期に区分した。第一期は太祖洪武年間から宣宗宣德年間までの期間である。皇帝たちは「英明」であり、チベット仏教崇奉にも節度があったとする。第二期は英宗正統年間から武宗正徳年間までである。諸帝は「平庸」で「佞仏」に陥り、なおかつその生活は「腐化」して、チベット仏教崇奉が甚だしくなつたとする。具体的には、京師においてチベット仏教僧への称号賜与・光祿寺による支給が多くおこなわれたこと、呪術的なものも含めて宮中でのチベット仏教仏事が頻繁となったこと、チベット仏教僧のための造寺建塔や土地・佃戸の賜与がなされたこと、大量のチベット仏教度牒が発行されたため少なからぬ漢人もそれ取得して社会騒乱を招いたこと、はては武宗自身が大慶法王としてチベット仏教僧になつてしまったことなどを挙げている。第三期は世宗嘉靖年間以降である。世宗は順天府からチベット仏教僧を放逐した。そのうち穆宗以降の諸帝はふたたび少なからずチベット仏教を崇奉したが、第二期ほどのようなことはもはや起こらなかった。このように何孝榮は、京師におけるチベット仏教の盛衰を皇帝がそれを崇奉したか否かに求めて区分し、しかもそれを明らかに負の現象として描いている。なおかつ、チベット仏教を崇奉した皇帝の、その崇奉の理由についても、即身成仏したかったから、神秘的な色彩に魅せられたから、番經廠など宮廷中にチベット仏教信仰を促す環境があつたから、僧侶その人を崇拜するチベット仏教の特徴が彼らへの恩遇として具現したから、といった点を指摘し⁽²⁰⁾、あくまでも君主が宗

教的に惑溺したからという理由によってそれを理解しようとした。

この点、陰海燕⁽²¹⁾から出された時期区分には、注視すべきものがある。陰海燕は、明の対チベット仏教政策を四期に区分する。第一期は太祖洪武年間から代宗景泰年間までの期間であり、元代の対チベット「統治主権」を継承すること、次に「政教分離」の原則を堅持することが基本方針とされたとする。とくに太祖代・成祖代において具体的統治策としての「多封衆建」体制が徹底され、宣宗代・正統期の英宗代・代宗代もよくこれが踏襲されたと言う。正統年間の英宗と代宗の治世を対チベット政策の傾向が強かった時代の範疇に入れることは、陰海燕所論の特徴の一つであろう。第二期は英宗の天順年間・憲宗成化年間・孝宗弘治年間・武宗正徳年間であり、この時期に、「内地」のチベット仏教への統制が大きく薄弱化したとする。第三期は世宗嘉靖年間のチベット仏教排斥の時期であり、第四期として穆宗隆慶年間以降の対モンゴル関係が絡んでくる時期を画した。

以上のうち、ここでの問題関心の対象とすべきは第二期に区分された「内地」のチベット仏教僧への厚遇であることになるが、この第二期に関して陰海燕は、帝室が「溺仏」したため、少なからぬチベット仏教僧が「法王」号（チベットにおいて冊立した三法王ではない一代かぎりの法王号）・「仏子」号を授与されたこと、そのときとくに宦官による「伝奉」による賜号がきわめて多かったことを指摘した。結果的に、留京チベット仏教僧がそれぞれの肩書を帯びることによって、一種の特権的な「官僚僧団階層」を形成したとさえ述べている⁽²²⁾。

このように「内地」のチベット仏教僧への統制が弱体化したことについての陰海燕の見解の特徴は、もちろん皇帝個人の嗜好・態度によるところが大きいの⁽²³⁾も、その背景に、明の君主独裁という構造があったことを考慮している点である。つまり、単に皇帝個人の資質や信仰問題に収斂させてしまうことを回避し、むしろ君主権が極限にまで肥大した明の政治体制とその矛盾へと議論を展開して、この異様なまでの留京チベット仏教僧厚遇を説

明しようとしたわけである。とはいえ、前半の諸帝が政策として適切な態度をとり、対して中盤の諸帝が「溺仏」してしまつたとして、そこに墮落の道筋を描いたことは、「英明」な皇帝の時代から「佞仏」「腐化」した皇帝の時代へとこの時期をとらえた何孝榮と同様である。

第二節 課題と方法

まず、考察の時間的・空間的範囲を画定しておく。かなりの数のチベット仏教僧が京師に在留したのが順天府への遷都後、実質的には宣宗代以降であることは、ほぼどの研究においても認められている。成祖代にはテシンシエクバ迎請という一大事件があつたし、また、他のチベット在地勢力からの朝貢使も頻々と訪れたが、応天府に大量のチベット仏教僧の集団が形成された形跡はない。また、世宗代初期に留京チベット仏教僧が京師から退去させられたこともすでに定説となっている。よって留京チベット仏教僧に関する検討は、まず時間的には宣宗宣徳年間から武宗正徳年間まで、実録で言えば、『明宣宗実録』・『明英宗実録』・『明憲宗実録』・『明孝宗実録』・『明武宗実録』の五篇がその主な対象となる。また空間的には、順天府が対象となる。

では、この時期の順天府におけるチベット仏教僧在留という現象は、単に儒教イデオロギー国家における君主の逸脱行為であり、京師の汚点たる弊事に過ぎなかつたのであろうか。

たしかに留京チベット仏教僧の隆盛が、皇帝による保護を一つの基盤としていることまでは、異論の余地はあるまい。問題は、ではなぜ、儒教君主であるはずの諸帝が京師のチベット仏教僧の大集団を擁護するという不可解な態度をとりつづけたのかという点にある。たとえば武宗について少なからぬ先行研究が指摘しているように、実際、

個人として宗教的関心を抱いた皇帝がいたことは動かしがたいだろう。しかし、そうであったとしても教誡師として数人のチベット仏教僧を手元に置けばこと足りるはずであり、千余人規模——史料によっては、さらに大規模な数値がでてくる——の僧侶を京師の仏寺に抱えている必要はない。

(一) 課題

(1) 「英明」から「腐化」へ——なぜ、そう見えるのか

これまで見てきたように研究状況を概観すれば、先論が、宣宗は「英明」であったため留京チベット仏教僧に対して抑制的で、これとは対照的に英宗以降は彼らをいたずらに寵遇する「溺仏」「腐化」が進行し、憲宗・武宗の崇仏に至ってそれが最高潮に達した、という一つのストーリーを描いてきたことが分かる。では、なぜ、そのように見えるのだろうか。

各実録には、その皇帝が個々の留京チベット僧に関してどのような勅命を出したかを記した記事が、それぞれ採録されている。これをまとめたものが本稿後掲の〈表1〉〈表2〉である。〈表1〉〈表2〉の詳細はこのあと「方法」の部分で述べるが、簡約に言えば、某皇帝が某留京チベット仏教僧にある外交的使命を託す勅命を出したとか、某皇帝が某留京チベット仏教僧の地位を上げる勅命を出したとか、そのたぐいの記事群である。比較のため、先の五実録の前後の八篇の実録についても同種の記事を採用してある。

これらの記事群は、大きく二分することができる。一つは、儒教的原理・官僚的原理に則した勅命がくだされたとする記事群である。たとえば、某皇帝が某留京チベット仏教僧の対チベット政策上の功績を賞した、あるいは某僧侶がいたずらに勢力を伸長することを某皇帝が止めたなど、政策上合理的な勅命がくだされたという記事がこれ

に該当する。いま一つは、儒教的原理・官僚的原理に反する勅命が発せられたとする記事群である。たとえば、とくに功績もないらしいにもかかわらず某留京チベット仏教僧を某皇帝が陞叙した、あるいは官僚からの反対にもかかわらず某皇帝が某僧侶のために営葬を命じたなど、政策上不合理な恩遇を与える勅命がくだったとする記事群である。前者は儒教イデオロギー国家の君主がそれにふさわしく抑仏的で「英明」な処遇を命じたことを示す記事群であり、対して後者は、崇仏的で「腐化」した君主が「異端」への優遇を命じたことを示す記事群であるとしてよい。

この二点の表を一瞥するのみでも、『明宣宗実録』においては前者の記事群がわずかに優勢で、『明英宗実録』から『明武宗実録』までの四実録においては後者の記事群が目に見えて優勢であることが分かる。したがって、この勅命記事群こそが、宣宗が「英明」であったため留京チベット仏教僧に対して抑制的で、他方、英宗から武宗までの諸帝が暗愚であったため彼らに惑溺する「腐化」の道に陥った、というあらすじの主要因の一つであると考えられる。

(2) 〈表1〉〈表2〉は、事実を反映しているのか

しかし〈表1〉〈表2〉に表れるこの映像を、「事実」の忠実な投影と見ることは、はたして妥当なのであろうか。

一例を挙げてみよう。先述のとおり、宣宗は留京チベット仏教僧に対して抑制的で「英明」な君主とされることが一般的である。ところがこれも前記したとおり、近年、才讓によって、実は宣宗もチベット仏教関連の事業に熱心であったことが明らかになりつつある。また、本稿の続編において確認するように、『明英宗実録』（巻十七、正

統元年五月丁丑条）記事によって、遅くとも宣徳年間末期には留京チベット仏教僧がすでに千人余の規模の集団を形成していたことが判明する。なおかつ同記事には、彼らが「西天仙子」「大国師」などの称号を与えられ、光祿寺の支給によって留京生活を謳歌していたことさえ記されている。つまり宣宗代においても、その後の諸帝の時期にはほぼ匹敵するような留京チベット仏教僧優遇がおこなわれていたと考えるべきこととなる。しかし〈表1〉〈表2〉に見るように、『明宣宗実録』においては、個々の留京チベット仏教僧に対する勅命記事、とくに優遇のそれが甚少である。そのため宣宗は、一見したところ、留京チベット仏教僧に対して抑制的で「英明」な皇帝と映ることになる。

他方、先に沈衛榮の指摘として紹介したとおり、留京チベット仏教僧最盛期と考えられる成化年間においても、隆善護国寺・慈恩寺・能仁寺に滞在したのは千人ほどと見られている。たしかに『明憲宗実録』（巻二百六十、成化二十一年正月己丑条）には、「大慈恩・大能仁・大隆善護国三寺の番僧、千余」であるため、扶持や役夫が不足している、という記事が見える。つまり、きわめて崇仏的であったされるこの憲宗の時代も、主要三寺院に千人規模の留京チベット仏教僧が収容されて国家からの支給にあずかっていた、という事態に限定すれば、宣宗代末年とおそらくほぼ変わりがないわけである。ところが、〈表1〉〈表2〉に見るように『明憲宗実録』には、くだんの三寺に所属するチベット仏教僧をはじめとして、留京チベット仏教僧優遇の勅命記事が極端に多い。そのため、憲宗がことさらチベット仏教僧を寵遇した、と読みとられることになる。⁽⁶⁾これこそが、憲宗が「溺仏」「腐化」した皇帝と評される大きな理由の一つとなってきたことは疑いない。

このように考えると、〈表1〉〈表2〉に見るかたちで残され、どの朝代が抑仏的で、どの朝代が「溺仏」的であったのかを表現してしまっている勅命記事群が、必ずしも「事実」を伝えるものではないことが了解される。その

他の情報を総合すれば、順天府の京師としての機能が固まった宣宗宣德年間以降、武宗正徳年間まで、政権はある程度一貫して留京チベット仏教僧を優遇し続けていた可能性が高い。そうであるとすれば、〈表1〉〈表2〉の記事群は、たしかに「事実」の一端を伝えるものではあるが、むしろいわば偏頗につかみとられたそれであることになる。したがって、「英明」から「腐化」へという単純な下降線を想定することはいささか早計と考えなければならぬ。

(3) では、なぜ実録に〈表1〉〈表2〉のようなかたちで勅命記事が採録されているのか

以上のようにたどつてくると、問題は、なぜその実録の編纂官たちが、現在我々が見るようなかたちで個々の留京チベット仏教僧に対する勅命記事、とくに優遇を指示する勅命記事を採録したのか、という点であることが分かる。つまり、〈表1〉〈表2〉に見られるような記事群、とくに優遇勅命の記事群をなぜことさら残したのか、という問題である。

このことは、〈表1〉〈表2〉を用いるに当たって、宣宗が抑仏的であり、英宗から武宗までの皇帝が「溺仏」的であったと額面どおりに読みとるよりも、『明英宗実録』編纂官たちが皇帝の「溺仏」的勅命を記述することに消極的であり、対して『明英宗実録』から『明武宗実録』までの編纂官たちが皇帝の「溺仏」的勅命を記述することに概して積極的であった、と読みとるほうが妥当であることを意味する⁽²⁶⁾。だが、このことはまた、実録編纂官たちみずからが、すでに充分に自覚していたはずのことである。明が儒教イデオロギー国家である以上、自分たちが先帝の抑仏的勅命を記すこと、あるいは「溺仏」的勅命を捨象することはすなわち彼を名君として奉賛する作業であり、逆に、「溺仏」的勅命を多数載せることはすなわち先帝を暗君として非難する作業にほかならないと、編纂

官たちはよくわきまえていたはずであるからである。その皇帝が暗君であったからチベット仏教僧を盛大に優遇した、という単純な問題などではまったくない。編纂官たちが、ある皇帝の留京チベット仏教僧への優遇勅命を多く書きたてたとき、それは当該皇帝を暗君として史上に刻みこむための手段の一つであり、極言すれば、それによって暗君像を「造形する」作業にほかならなかったことになる。

それではなぜ、『明宣宗実録』編纂官たちは抑仏的で「英明」な皇帝を描き、対して『明英宗実録』から『明武宗実録』までの編纂官たちは皇帝の「溺仏」「腐化」した姿を歴々と描いてしまったのであろうか。それぞれの実録の編纂官は必ずこの部分の判断をおこなっているわけであるが、それは何によっているのか。この点を考察することが本研究の課題となる。

(4) 君主独裁体制下の君主と官僚

この課題の基底には、おそらくより構造的な問題がある。それは仁宣期以降、実質的には宣宗代以降、皇帝と官僚、とくに皇帝と閣臣との力関係に、どのような変化が生じていたか、という問題である。ここで重要となるのは、ある実録の編纂方針を決定するのはその総裁官であること、総裁官には原則的に実録編纂時の閣臣が当たること、もちろん『明宣宗実録』から『明武宗実録』までの総裁官も編纂時の閣臣とよく一致することである。

明代の政治制度を考究した関文発・顔広文は、明代内閣は永楽期にその基本が形成されたのち、おおむね次の三つの段階を経たとしている。⁽²⁶⁾ 第一段階が仁宗代・宣宗代であり、もともと五品でしかなかった閣臣が他の高品秩の肩書をも帯びることによって品秩をあげたこと、政治案件の決裁にはあらかじめ閣臣の条旨・票擬が付されるようになったことなどを以て、實際上、丞相と変わらない存在となったとする。第二段階としては、英宗代から武宗

代までを画している。当初は英宗が幼帝であったため、いわゆる三楊が固める内閣の比重がさらに増した。ただし、三楊亡きあとは、凡庸な閣臣が続いたこと、宦官の勢力が伸長したことなどにより、いったん内閣の権力は下降に向かった。このうち第三段階の世宗代・神宗代に入ると、夏言・徐階・張居正ら赫赫たる人材が出ることによっていま一度盛時を迎えたが、張居正ののちの内閣は衰落の一途をたどったと言う。

この内閣の機能の推移には、『明宣宗実録』が留京チベット仏教僧関連の勅命記事によって抑仏「英明」型の皇帝を描き、対して『明英宗実録』から『明武宗実録』までが同記事群によって「溺仏」「腐化」型の皇帝の姿を記し、そして『明世宗実録』以降は同種の勅命記事そのものが激減する、という〈表1〉〈表2〉の結果と通ずるものがある。はたしてこれは偶然なのであろうか。

ここで、明の歴帝によるチベット仏教僧優遇という事態全体を、いったん俯瞰してみよう。まず成祖代においては、君主と官僚とが一丸となって、儒教イデオロギー国家の君主でありながら悠然とチベット仏教僧を優遇してのける君主像を提示した。胡広たちの文書や、あるいは御製文書が、儒教的な「異端」「華夷」観念を超えた普遍的君主の形象を描いてみせたわけである。しかもこれらの文書のなかでは、天から瑞祥がくだったことが記され、成祖の統治権正当性の証明となっていた。武力闘争を経て成立した政権であるがゆえに、君臣一体となって君主を正当化する必要があったためである。では、仁宗以降の政権においては、どのようなことが起こりえたであろうか。

これを、まず君主の側から考えてみる。すると、儒教イデオロギー国家の君主でありながら専権事案として留京チベット仏教僧を優遇してみせるというこの君主像が、永楽期において胡広らが成祖のために提示したところの超越的な君主の形象、すなわち、官僚が奉ずる儒教的な「異端」「華夷」観念を超えた普遍的君主の形象とはなっていることに気づく。ただしこの場合、胡広らが成祖のためにおこなった統治権正当性の証明は付随していない。留

京チベット仏教僧を優遇したことによって何らかの瑞兆があった、というたぐいの言説が官僚層から出た形跡は皆無であるからである。とはいえ、成祖政権ほどには統治権正当性表現への渴望が激しくなかったとすれば、儒教やその「異端」「華夷」観念を超越した普遍的君主像を維持するというのみでも、その意義は小さくなかったであろう。ましてや仁宣期以降の内閣の権力伸長は、相対的に君主権の比重が軽くなっていたことを意味するから、それでもやはり君主に独裁権力があることを表象する装置としての有用性は決して低くはなかったはずである。

次に、この現象を官僚側からとらえてみよう。ここで考慮すべきは、ごく巨視的にとらえた場合、中国における君主と官僚とがどのような関係にあったかである。たとえば王瑞来は、中国の官僚にとって善き君主とは無為にして政治に干渉しない存在であり、君主を「英明」たらしめないことこそが歴代官僚たちの識見であった、と総括した。⁽³⁰⁾ もちろん明の君主権の絶対性ということは大前提とはなるが、国家創建者である太祖や篡奪者である成祖の時代と比較すれば、仁宣期以降は、王瑞来所論のこの通常システムとしての歴代中国の君臣関係にある程度近接したはずである。そうであるとすればその時期の官僚たちには、「英明」ではない君主の姿を描く機会なり理由なりがあれば、それを利用するにやぶさかではない、という力学が潜在的に作用していたとしてもおかしくはない。このような官僚たちにとって、君主の留京チベット仏教僧への対応を実録に叙述することには、次のような利点があったと考えられる。

第一に、先帝の行跡を審判しえた、という点である。たしかに明の君主権はかつてない強大なものとして設定されてはいた。しかし史官としての彼らには、ある皇帝が没したのち、その皇帝をいかなる君主として後世に伝えるかを選択する権限が掌握されていた。なおかつ閣臣の権力が上昇した仁宣期以降は、この特権を行使することに、彼らはさしたためらいを覚えなかったであろう。こうして「英明」「腐化」それぞれの君主像を造形する機会とし

て、実録の総裁官、すなわち閣臣たちは、先帝の留京チベット仏教僧への勅命の採録様態を選択したのではない。仁宣期以降、権限を拡大しつつある閣臣たちが、その影響力行使の局面としてこの機会を利用した、と言い換えてもよい。

第二に挙げうる官僚にとつての意義は、実録に先帝をいかに描いたかが、後世を待たず、まずは進呈先の今上皇帝への圧力となりえたのではないか、という点である。たとえば後掲〈表1〉〈表2〉から推測すると、『明憲宗実録』を進呈された孝宗の治世には、実態として留京チベット仏教僧への優遇勅命が一時減少していた形跡がある。これは『明憲宗実録』の途方もない有り様に接した君主権側の自制的反応を暗示してはいくはないだろう。そうであるとするれば、それは編纂官たちが君主権に対して影響力を及ぼしえたいま一つの局面ということになる。

君主として留京チベット仏教僧に何らかの対応をすること、そして官僚としてその君主の態度をいかに叙述するかを選択することには、以上のように、君主側と官僚側それぞれにとつての有用性があったことが想定される。纂奪政権であったがゆえに君臣の一体性が高かった成祖代ののち、仁宣政権以降は、実録編纂官たる閣臣の権力が伸長し、それに反比例して君主権がいくばくかの退歩なり落ち着きなりを得て、平時の政権への変質が進行した。そのなかにあつて、留京チベット仏教僧の存在は、ある種のランサーとして機能していたのではない。君主側に対しては、あいかわらず儒教にしばられない超越的な君主像を提供することが可能であつた。そして官僚、とくに実録史官たる閣臣に対しては、先帝を査定するとともに今上をも掣肘しうる材料を提供することが可能であつた。これらのことによつて、留京チベット仏教僧の存在が君主と官僚との力関係を調整し、その政治運営に実効性をもたらしただ可能性は低くあるまい。続編も含めて本研究は、最終的にはこの点を検証することを課題とする。

(二) 方法

(1) 〈表1〉・〈表2〉

これまで述べてきた課題に則して、本研究は次のような方法をとった。まず、各実録記事のなかから、名前の判明する個々の留京チベット仏教僧を対象とした勅命の記事を摘出し、〈表1〉にまとめた。前記した筆者の旧報告書でもこれに類する表を数点作成したが、煩雑にすぎた利用するにはあまりにも不便であったし、誤りも多かった。そこで今回、できうるかぎりの修正を試みつつ、より簡易な表を新たに作成した。この〈表1〉を一瞥するだけでも、たとえば『明憲宗実録』に優遇のための勅命記事が異様なまでに多いことなどを、即座に看取しうるはずである。

ここで「留京チベット仏教僧」と表記するときは、原則的に次の二つの条件を満たす者を指すこととする。

- ① 名前や肩書からチベット仏教僧であると判断される人物のうち、出身地名として、中央チベット（ウ・ツァン）（「烏思藏」「烏斯藏」）および西辺（「河州」「四川」「罕東衛」など）が冠されていない人物。
- ② それ以前一年以内に入貢した記事がなく、それにもかかわらず賜号・陞叙・賞賜などが記されるチベット仏教僧名。ここで一年以内とするのは、次の理由による。『礼部志稿』（卷三十六、凡貢回定限）には、「陝西」「四川」などの辺境各所の「番僧・番族」の京師滞在期間は「一箇月零二十日」、また「四川烏斯藏番王」「陝西贊善王」らの「番僧」のそれは「兩箇月」と記されている。これは万暦七年（一五七九）に発布された規定であるが、それ以前の時期においても、入貢・帰還するのみの人物の滞在期間が一年を越えるとは考えにくい。したがって、たとえば当該人物が本来は入貢者であっても、一年を越えて京師に滞在していたと推測されたとすれば、彼はもはや留京者と見なすこととする。

右の条件を満たすようではあっても、除外すべきと判断される者については、〈表1〉に付した注ⁱで述べた。

このようにして採取した留京チベット仏教僧関連の勅命記事を、〈表1〉ではA型からH型まで、八種の類型に分類した。A型は、その留京チベット仏教僧が明の対外交渉において起用されたという記事である。具体的には、チベット本土の法王・王に対する冊封使として、あるいは中国西辺のチベット勢力に対する詔諭使節として、ときに満州族に対する内偵者として派遣された、などの記事がここに分類される。B型は、ある期間、明らかに留京者であったチベット仏教僧が、いったん入蔵したのちふたたび帰朝したのを受け入れたとする記事、および彼への賜与がおこなわれたとする記事である。A型と異なり、政権による派遣命令があったとは記されていない事例をこれに分類する。そのため一見したところ朝貢・回賜と見なしかねないが、前記のとおり、留京チベット仏教僧を画定する段階で朝貢使は除外しているため、ここではあくまでも、もともと留京者であった者に対する処遇を採ることになる。以上のA型とB型は、チベットおよび西辺境界域と明との関係秩序を維持するための政治的功績を留京チベット仏教僧から引き出したことを示す勅命記事である。その皇帝の「英明」を読みとらせる記事群と言える。

続いてC型・D型・E型は、留京チベット仏教僧に対して皇帝が抑圧を加えたことを示す勅命記事である。C型は、彼らが留京することによる社会騒乱や、ある留京チベット仏教僧が罪を犯したことを以て、その退去・発戍・誅戮などを皇帝が命じたとするものであり、彼らの存在そのものを皇帝が否定したことを伝える勅命記事である。D型は、彼らの存在そのものを否定しようとはしないまでも、その社会的・経済的な活動を抑止しようとした勅命の記事である。たとえばあるチベット仏教僧の財産を没収する建議が官僚側からなされ、これに皇帝も賛同したとする記事や、チベット仏教僧の側が自分たちの権益を伸長しようとする何らかの要求を出したことに對して、それを皇帝が却下した場合などがD型に分類される。E型は、留京チベット仏教僧の地位の賜与・陞叙・襲替を皇帝が

却下したとする記事、および、ある留京チベット仏教僧の既存の地位を降格した記事などを一括する分類項目である。

対してF型・G型・H型はすべて、留京チベット仏教僧に何らかの優遇を与える勅命が出されたとの記事である。F型に分類されるものは、あるチベット仏教僧に対して留京を勅許したとの記事、あるいは追放を求める官僚の上奏を却下したなどの記事であり、いずれも京師におけるその存在そのものを皇帝が許したことを示す勅命記事である。G型は、留京チベット仏教僧に対する賞賜を記す記事や、彼らのうちのある者が没したのに官費による営葬や墓塔造営の勅命が出されたなどとする記事である。これらに加えて、ある留京チベット仏教僧が彼に繋がる中国西辺のチベット仏教寺院僧への賜与などを請願し、それを皇帝が認可したとの記事もG型に分類する。つまりG型の分類項目は、留京チベット仏教僧に対して皇帝が社会的・経済的な優遇を与えたとする勅命記事のためのものである。H型は、皇帝がある留京チベット仏教僧に称号を賜与・陞叙した、印章や誥命を与えたなど、その地位を保証したことを伝える勅命記事である。このH型に分類されるものが、のべ五百人余りの勅命全対象者のうち、のべ四百四十人を超えるから、圧倒的にその数が多い。

以上のうち、留京チベット仏教僧に対する抑圧を示すC型・D型・E型の項目と、彼らに対する優遇を示すF型・G型・H型の項目とは、それぞれあい反するものとして対応関係にある。すなわち、彼らの存在を否定しようとするC型と、彼らの存在を肯定しようとするF型とが、まったく逆の要素をもつものとして対応する。同様にD型とG型とが、そしてE型とH型とが対応する。これを皇帝と官僚との関係という視点から見れば、留京チベット仏教僧の勢力を削減しようとするC型・D型・E型の三項目は、儒家知識人である官僚層の立場から見て、いずれも正当な皇帝の処断として実録に記載された記事である。この意味で、C型・D型・E型の三項目は、對外秩序を維持

するための処遇であるA型・B型とともに、儒教的原理・官僚的原理に則した「英明」な皇帝の動きを表現する記事である。これに対してF型・G型・H型に分類される対応は、その内容から見て儒教的原理・官僚的原理からは排斥されるべき「腐化」した皇帝の姿を描くものであり、そして実際、官僚層からの反発を招きつつも勅命によって断行されたことが付記される場合を含む。

ただし、F型・G型・H型のなかにも、それが官僚側の発案によるもの、あるいは官僚側の是認のもとでおこなわれたものであることが記される事例が皆無ではない。そのため、これらの記事には○印を付した。また逆に、官僚側の反対があつたにもかかわらず皇帝の決定によって断行されたと記載されている場合には▽の印を、伝奉聖旨など宦官の関与が認められる場合には▼を付した。

〈表2〉は、〈表1〉で勅命の対象として挙げられた留京チベット仏教僧のべ人数を集計したものである。儒教的原理・官僚的原理に則したA型からE型までと、儒教的原理・官僚的原理に反したF型・G型・H型とを、それぞれ合計した数値も載せた。後者に関しては、○・▽・▼それぞれの数値も示した。

(2) 『明英宗実録』と『明憲宗実録』

いま〈表1〉〈表2〉を一見すると明らかなように、個々の留京チベット仏教僧に関して出された勅命の記事は、『明宣宗実録』・『明英宗実録』（表1）〈表2〉ともに、正統・景泰・天順の三期に分けた・『明憲宗実録』・『明孝宗実録』・『明武宗実録』の五篇に集中している。先行研究から、今回の論題が対象とする時間的範囲が宣宗代から武宗代までであり、史料的にはこの五篇の実録が対象となることはすでに述べたが、〈表1〉〈表2〉の結果もそれをそのまま反映していると言つてよい。

そのほかの実録は、このたぐいの記事がきわめて少ない。『明太祖実録』（応天府期）においては、勅命記事の対象となったチベット仏教僧は、わずか二人（年平均〇・〇六人）にすぎない。『明太宗実録』も、応天府期においてのべ三人、順天府期において三人、合計のべ六人（年平均〇・二六人）が勅命記事の対象となったのみである。遷都がからむため、チベット仏教僧が留京するという事態が起こりにくかったものであろう。次の『明仁宗実録』は永楽二十二年と洪熙元年のみを叙述対象としているにすぎないため、一人が対象となったのみである。そのあと前記の五篇の実録が、にわかに留京チベット仏教僧への勅命記事を多く採録することとなり、これにともない対象となったチベット仏教僧の数が増加する。しかしその後の『明世宗実録』以下の五篇の実録では、ふたたびこの種の記事がほとんど途絶えてしまう。言うまでもなくこれは、世宗代初期において京師からチベット仏教僧が一挙に退去させられたためである。

問題となる『明宣宗実録』から『明武宗実録』までの〈表1〉〈表2〉の結果をさらに観察すると、二篇の実録の記事採録様態がとびぬけて特異であることに気づく。一つめは、『明英宗実録』、とくにその代宗景泰年間の部分である。『明英宗実録』全体でもF型・G型・H型、すなわち「腐化」の指標の勅命記事が多くなっているが、とくに代宗景泰年間に關しては、対象者がべ七十五人（年平均八・三三人）と、憲宗成化年間に次ぐ数値となっている。特異な採録様態をもつ二つめの実録は、何と言っても『明憲宗実録』である。F型・G型・H型の勅命記事の対象者はのべ二百四十六人（年平均一〇・二五人）で、全実録のなかでずばぬけて多い。かねてチベット仏教尊崇皇帝として名高い武宗の実録でさえ、F型・G型・H型の対象者はのべ五十七人（年平均三・三五人）であるから、『明憲宗実録』は年平均値でその三倍ほどになる。『明武宗実録』は帝統変換後に編纂されたものであるため、当然、武宗の崇仏皇帝ぶりを容赦なく暴露しているはずである。したがって、崇仏を示す数値がそれよりもはるかに

高い『明憲宗実録』の様態は、常軌を逸していると言わざるをえない。

これらの結果から、本稿の続編として、まず『明英宗実録』を対象としたものが一点、ついで『明憲宗実録』を対象としたものが一点、必要であることが分かる。前者においては、皇帝による留京チベット仏教僧優遇を個々の僧侶の名前を挙げるかたちで具体的に記述してしまう、という形式の勅命記事が、なぜここで突如多く出現したのかを検討することになるであろう。後者においては、もはや異常としか言いようのない頻度で優遇勅命記事が登載されたこと、とくに「刺麻」など地位の低いチベット仏教僧の個人名まで詳細に採録されたことの理由が問われなければならぬ。

いずれの続編においても、まず、〈表1〉〈表2〉に表れる『明英宗実録』『明憲宗実録』中の関連記事群それぞれの特徴をより具体的に観察する。次に、ではなぜその編纂官たちが、そのような特徴をもつかたちで編纂したかを考える。最後に、これらのことが君主独裁体制下の君主と官僚との関係にどのような意味をもっていたかを検討することとする。

おわりに

以上、各実録に記された留京チベット仏教僧関連の記事をめぐり、先行する諸研究を概観するとともに、本研究の課題と方法についてまとめた。本研究は、留京チベット仏教僧の実態そのものや、彼らに対する政権の対応それ自体を対象とするものではない。あくまでも、実録、とくに『明宣宗実録』から『明武宗実録』までの五篇の実録における留京チベット仏教僧関連の勅命記事の採録様態を検討し、なぜそのようなかたちで採録されたのかを考え

ようにするものである。

この試みは、広い意味では史料批判に相当するものなのかもしれない。しかし本研究が目指すところは、それだけの史官たちがいかなる理由で、どのような歴史像を残す判断をくだしたのか、いわば『歴史的事実』が立ちあがるその場面に立ちあうことにある。彼らがそこでくだした判断は、いたずらに曲筆した結果といったものではないだろう。たとえそれが意図的な記事選択であったとしても、彼らはそれを史官としての自覚のもとに、みずから『事実』として伝えるべきこと gara として採択したはずである。彼らのその判断の理由を続編において手際よく追うことができるかどうかは分からないが、少なくともその作業が必要であることは、本稿において述べてきたつもりである。

謝辞

〈表1〉の仏教僧名のうち、サンスクリットのラテン文字化に当たっては、(公財) 中村元東方研究所専任研究員であられる田中公明先生のご教示を仰ぎました。謹んで、あつく御礼申しあげます。また、大谷大学名誉教授福田洋一先生・早稲田大学教授石濱裕美子先生には、田中先生へのご紹介の労をたまわりました。あわせて、あつく御礼申しあげます。

注

① 乙坂〔1999年〕・〔2001年〕・〔2003年〕。

② 新宮学「二〇〇四年」一八頁。この年次が基準となるものの、遷都に関してその後もさまざまな紆余曲折があることは、同書が詳細に説くところである。

③ たとえば、『明英宗実録』（巻七十九、正統六年五月甲寅条）北京会同館大使姫堅らの上奏に、この「分住」という語が見える。

④ 熊文彬「二〇二〇年」三二—三六頁。

⑤ 乙坂「一九九八年」四九—一四八頁。

⑥ 沈衛榮「二〇一〇年」五八六—六一三頁。なお、同氏の Shen[2017] 論文は、北京におけるチベット仏教経典翻訳を中心に論じたものであるが、これは留京チベット仏教僧の活動の一端を描くものともなっている。

⑦ 佐藤長「一九八六年」一七三—二七二頁。

⑧ 熊文彬「二〇二〇年」三七—三九頁。

⑨ 佐藤長「一九八六年」三一—一頁。

⑩ 杜常順「二〇〇五年」五九—六〇頁。ただし杜常順は、留京チベット仏教僧が「治藏」において有効な存在であったとも述べている。「同前」六五—六六頁参照。

⑪ 才讓「二〇〇七年B」。

⑫ 趙改萍「二〇〇九年」二五三—二五五頁。なお、趙改萍もまた杜常順と同じく、留京チベット仏教僧への厚遇が対チベット政策の一環でもあったとしている。「同前」二五二頁—二五三頁参照。

⑬ 熊文彬「二〇二〇年」三〇頁。

⑭ 佐藤長「一九八六年」二七三—二八六頁。才讓「二〇〇七年A」。何孝榮「二〇〇七年」二五一—二六六頁。李洵「二〇〇九年」六六—六九頁。張明林「二〇一一年」六三頁。

⑮ 佐藤長「一九八六年」三一—三二四頁。

⑯ 杜常順「二〇〇六年」。

⑰ 何孝榮「二〇〇七年」三六八頁。

(18) 何孝榮「二〇〇七年」三八六頁。

(19) 何孝榮「二〇〇五年」一一九—一二〇頁。のちに何孝榮は、その内容を大幅に増補して単行本に収録したが(何孝榮「二〇〇七年」一四八—三四三頁)、三期区分はそのまま継続している。

(20) 何孝榮「二〇〇五年」一三〇—一三二頁。

(21) 陰海燕「二〇一九年」五八—六九頁。本文で紹介したように、陰海燕は、「宣徳・正統・景泰時期」には明初以来の対チベット政策がよく遵守されたが、「自天順以後」帝室の「潮仏」が激しくなったとして、景泰年間までを第一期、天順年間以降を第二期と区分する。主として『明憲宗実録』(卷二十一、成化元年九月戊辰条)記事に依拠している。ただし同論文における節のタイトル中の文言としては、「洪武至天順時期」、「成化至正徳時期」と見える。

(22) 陰海燕「二〇一九年」六三—六四頁。

(23) 陰海燕「二〇一九年」六一頁。

(24) 佐藤長「一九八六年」一七三—二七二頁。

(25) たとえば、何孝榮「二〇〇七年」二〇八—二三三頁。

(26) 荷見守義(「二〇一五年」三三頁)は、日々膨大な案件が皇帝に上奏され、裁かれている官僚機構においては、実録に取り上げられる案件はそのごく一部にすぎない、と指摘している。つまり実録編纂官たちは、ごく選択的に採録記事を決定しているわけである。「潮仏」的勅命が多く登載されていることは、彼らがどのように意図した結果にほかならない。

(27) ある実録の編纂グループ構成員が列挙される場合、最初に記される監修官が名誉職的なものであり、実際の編纂作業の指揮、すなわち編纂方針の決定・記事の取捨などに当たったのが次に記される総裁官であることは、謝貴安「二〇一三年」九〇—九一頁参照。間野潜龍(「一九七九年」七〇—七七頁)も、まず纂修官や纂修兼考校官らが文稿を作成し、副総裁官がいる場合はこれに送られて閲覧を受け、さらに総裁官に送られてその刪潤に供されたと言う。やはり内容の取捨は、最終的に総裁官によって決定されたことが分かる。

(28) それぞれの実録の総裁官が誰であるか、およびその当時の彼らの官職については、謝貴安「二〇一三年」一四六—二四八頁参照。また、各実録の編纂期、すなわち次帝初期の閣臣の顔ぶれについては、『明史』(卷一百九、表第十、宰

輔年表一)・『同前』(卷一百十、表第十一、宰輔年表二)も参照。

⁽²⁹⁾ 関文発・顔広文「一九九五年」二四頁―四二頁。なお内閣の変遷については、山本隆義「一九六八年」四七九―四九二頁、王其桀「一九八九年」二九―三三八頁も参照。山本隆義は成祖代、仁宗代と宣宗代、英宗代以降と区分して分析している。王其桀は成祖代から宣宗代、英宗代から武宗代、世宗代から神宗代、光宗代から毅宗代と区分する。関文発・顔広文のものも含め、いずれも、宣宗代と英宗代との間には線を引いていることになる。

⁽³⁰⁾ 王瑞来「二〇〇一年」五九頁。

⁽³¹⁾ 乙坂「一九九八年」九五―一四八頁。

⁽³²⁾ 〈表1〉注ii参照。

〈表 1〉各実録に採録された個々の留京チベット仏教僧に関する勅命記事

凡例

(1) 類型 A型～H型

【儒教的原理・官僚的原理に則する勅命】

【政治的利用】

A型：対外交渉における起用

- ・冊封使や内偵などとして派遣
- ・上記からの帰朝時の賞賜、陞叙

B型：対外交渉における優遇

- ・留京者がいったん入蔵したのち帰朝
- ・上記に対する賞賜、陞叙

【抑圧】

C型：存在に対する否定

- ・放逐、発戍、誅僇

D型：社会的・経済的權益に対する否定

- ・財産没収
- ・チベット仏教僧による社会的ないし経済的要求を却下

E型：地位に対する否定

- ・降格、賜号や陞叙や襲替の請願を却下

【儒教的原理・官僚的原理に反する勅命】

【優遇】

F型：存在に対する肯定

- ・所属京師仏寺指定、招聘、釈放

G型：社会的・経済的權益に対する肯定

- ・賞賜、寺塔造営、營葬

H型：地位に対する肯定

- ・賜号、陞叙、印章等授与

(2) 儒教的原理・官僚的原理に反する勅命のうち、官僚との合意・非合意、宦官の関与

○——F型・G型・H型のうち、官僚の要請に応えての勅命

▽——F型・G型・H型のうち、官僚の反対を抑えての勅命

▼——F型・G型・H型のうち、伝奉聖旨など、宦官の関与が認められる勅命

(3) 人名中の()と〔 〕

・直前の文字に訂正すべき可能性がある場合、訂正案を()内に示す

・その部分に文字を補うべき可能性がある場合、訂正案を〔 〕内に示す

(4) 陞叙後の称号が記載されるなど通常の陞叙記事である場合、賜印等が付記されていても、これを省略する

巻数	記事の年/月日(西暦)	対象となったチベット仏教僧名 ⁱ	類型	内容	○ ▽ ▼
『明太祖実録』					
122	洪武 12/2 甲子(1379)	西番僧 憐真鎖南<Rin chen bsod nams	G	彼を含む六人に米三十石を授与	
176	洪武 18/12 是歳(1386)	(鷄鳴寺右覚義)西番僧 星吉監藏<Seng ge rgyal mtshan	F	鷄鳴寺別院に住持させる	
『明太宗実録』 ⁱⁱ					
33	永楽 2/8 癸巳(1404)	番僧 丹竹領占<Don grub rin chen	A	西番八郎等簇招諭のため派遣	
〃	〃	(番僧)格敦増吉<dGe 'dun seng ge	A	〃	
59	永楽 4/9 壬戌(1406)	鷄鳴寺番僧 端行(竹?)領占(永楽 2/8 に既出 ⁱⁱⁱ)	A	八郎等簇招諭のため派遣したところ諸簇来朝、賞賜	
161	永楽 13/2 庚午(1415)	禪師 縁旦監判<Yon tan rgya mtsho	H	灌頂慈慧妙智大国師に	
〃	〃	領占端竹<Rin chen don grub	H	灌頂慈恵弘济国師に	
210	永楽 17/3 辛酉(1419)	僧録司左覚義 張荅里麻<張 Dharma	C	専横につき伏誅	
『明仁宗実録』					
2 下	永楽 22/9 丁亥(1424)	西天刺麻 板的達<Paṇḍita ^{iv}	H	円覚妙応慈慧〔普?〕濟輔国光範洪教灌頂大善大国師に	
『明宣宗実録』					
2	洪熙 1/6 辛酉(1425)	右〔善?〕世 端竹領占<Don grub rin chen ^v	H	円妙広智大国師に	
4	洪熙 1/7 己丑(1425)	僧人 班丹端竹<dPal ldan don grub	G	彼を含むチベット仏教僧三百二十六人に白金を授与	
12	洪熙 1/12 戊寅(1426)	僧録司右闡教 班丹札失 ^{vi} <dPal ldan bkra shis	H	浄覚慈濟大国師に	
13	宣德 1/1 癸亥(1426)	浄覚慈濟大国師 班丹札失(同上)	B	留京者であった彼が、いったん入蔵ののち帰朝して万寿聖節を賀したため、賞賜	
14	宣德 1/2 戊辰(1426)	浄覚慈濟大国師 班丹札失(同上)	B	彼を含む入朝者ら四百四十一人に賜与	
15	宣德 1/3 庚子(1426)	使臣 阿木葛<Amogha ^{vii}	H	灌頂浄修弘智国師に	
21	宣德 1/9 壬寅(1426)	国師 阿木葛(同上)	B	留京者であった彼が、いったん入蔵ののち大乘法王使臣として帰朝したため、受け入れ	

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

22	宣徳 1/10 壬戌(1426)	(烏思藏国師)阿木葛(同上)	B	上記帰朝に対する賞賜	
60	宣徳 4/12 乙未(1430)	(烏思藏国師)阿木葛(同上)	B	留京者であった彼が、いったん入蔵ののち帰朝したため、受け入れ	
62	宣徳 5/1 乙丑(1430)	(烏思藏国師)阿木葛(同上)	B	彼を含む千人ほどのチベットからの入朝者に賞賜	
79	宣徳 6/5 壬辰(1431)	能仁寺西番僧 孤納芒葛辣 <Guṇamaṅgala	C	「惑衆取財」につき当斬	
『明英宗実録』(正統年間)					
13	正統 1/1 丁丑(1436)	箭失三竹<bKra shis bsaṃ grub	H	浄慧禪師に	
32	正統 2/7 丁未(1437)	行在僧録司 ^{viii} 僧官左講経 帖納室哩<Jñānaśrī	E	彼を含む当該官署の十七人が勅命授与を請願。却下	
33	正統 2/8 壬戌(1437)	大国師端竹領占〔の徒?〕完ト扎巴監參 <mKhan po grags pa rgyal mtshan	H	禪師に	
55	正統 4/5 己巳(1439)	国師 並蒙葛(宣徳 1/3 などに既出)	H	西天仏子大国師に	
66	正統 5/4 壬午(1440)	禪師 葛藏<sKal bzang	A	闡化王冊封の正使として派遣。私易した茶・綵段を烏思藏へ持ち出したことを礼部が指摘するも、英宗は穏便な処置	
"	"	(禪師)昆令<Kun rin	A	上記の副使として派遣	
67	正統 5/5 庚申(1440)	禪師 葛藏(正統 5/4 に既出)	A	彼ら対闡化王使節団所用経費について戸部が上奏。了承	
69	正統 5/7 壬寅(1440)	番僧 捏汪科兒<Nirvāṇakara	H	静範禪師に	
"	"	(番僧)羅藏<Blo bzang	H	弘浄禪師に	
"	"	(番僧)袞令<Kun rin	H	都綱に	
"	正統 5/7 癸丑(1440)	仏思巴監藏<'Phags pa rgyal mtshan	H	浄修三蔵国師に	
"	"	卓兒巴藏ト<'Byor pa bzang po	H	灌頂弘慈妙濟国師に	
79	正統 6/5 甲寅(1441)	(大慈恩等寺分住)阿木葛(宣徳 1/3 などに既出)	G	会同館大使が、当寺等に分住する彼ら三百四十四人の僧による館夫占用を問題化するも、チベット仏教僧に有利な勅命	▽

〃	〃	(大慈恩寺分住) 大国師 班 丹 ^ツ 箭失(洪熙 1/12 などに既出)	G	〃	▽
87	正統 6/12 己亥(1442)	刺麻 綽丹星吉<Chos ldan seng ge	H	淨悟広慧国師に	
102	正統 8/3 辛未(1443)	翊化禪師 吾把帖耶室里 <Upajayaśrī?	H	灌頂広善大国師に	
104	正統 8/5 己未(1443)	刺麻 扎巴監粦<Grags pa rgyal mtshan	H	灌頂門妙広智大国師に	
〃	〃	(刺麻) 捨刺巴<Shes rab dpal	H	弘善妙智国師に	
〃	正統 8/5 壬午(1443)	淨修弘智国師 鎖南捨刺 <bSod nams shes rab	H	淨修弘智灌頂国師に	
126	正統 10/2 乙巳(1445)	国師 沙加<Shākya ^{ix}	H	灌頂淨覚佑善大国師に	
〃	〃	禪師 班卓兒藏ト<dPal ‘byor bzang po	H	清心戒行国師に	
127	正統 10/3 癸未(1445)	禪師 相初班丹<Byang chub dpal ldan	H	清修戒定国師に	
〃	正統 10/3 辛丑(1445)	刺麻 答麻監藏<Dharma rgyal mtshan	H	崇善禪師に	
130	正統 10/6 戊申(1445)	妙戒禪師班卓兒の姪 桑兒結朵 兒只<Sangs rgyas rdo rje	H	禪師に	
136	正統 10/12 辛酉(1446)	大慈恩寺禪師 也失哩監剌 <Ye shes? rgya mtsho	E	国師への陞叙を、彼みずから 請願。却下	
137	正統 11/1 辛卯(1446)	灌頂国師 鎖南 ^ツ 釈刺(正統 8/5 に既出)	E	彼が西天仏子大国師号を襲替 することを、その弟子の慈恩 寺僧が請願。却下	
〃	〃	刺麻 桑加巴<Sangs rgyas dpal	E	上記とともに、彼への都綱職 授与が請願されるも、却下	
141	正統 11/5 壬申(1446)	鳥思藏 ^x 禪師 葛藏(正統 5/4 などに既出)	B	留京者であつた彼が、いった ん入藏ののち帰朝。受け入 れ、賞賜	
143	正統 11/7 戊辰(1446)	刺麻 箭思巴監粦<bKra shis dpal rgyal mtshan	H	灌頂淨慈妙智国師に	
〃	正統 11/7 丁亥(1446)	番僧 綽思吉星吉<Chos kyi seng ge	H	禪師に	
144	正統 11/8 乙巳(1446) ^{xi}	箭思巴監粦(正統 11/7 に既 出)	H	淨慈妙智国師に	
179	正統 14/6 丙辰(1449)	能仁寺番僧 朵兒只星吉 <rDo rje seng ge	C	誣奏の罪により発戍	

"	"	(能仁寺番僧)烏答麻室星(里?) <Uttamaśrī?	C	"	
『明英宗実録』(景泰年間(代宗代))					
182	正統 14/9 己卯(1449)	番僧 恭葛堅槃<Kun dga' rgyal mtshan	H	禪師に	
"	"	(番僧)賞初朶兒只<Byang chub rdo rje	H	禪師に	
"	"	(番僧)觀ト星吉<…? Seng ge	H	禪師に	
"	"	(番僧)班卓領占朶兒只<dPal 'byor? rin chen rdo rje	H	禪師に	
"	"	(番僧)帖納星吉<…? seng ge	H	都綱に	
184	正統 14/10 己巳(1449) ^{xii}	番僧 恭葛堅槃(正統 14/9 に既出)	H	崇教禪師に	
"	"	(番僧)賞初朶兒只(正統 14/9 に既出)	H	妙悟禪師に	
"	"	(番僧)班竹領占朶兒只(正統 14/9 に既出)	H	妙広禪師に	
"	"	(番僧)觀ト星吉(正統 14/9 に既出)	H	弘智禪師に	
188	景泰 1/閏 1 戊申(1450)	番僧 鎮南<bSod nams	F	兵書などを閲覽して拘留されていた彼を、釈放	
191	景泰 1/4 丙子(1450)	訳写西番字 ^{xiii} 番僧 堅參列 <rGyal mtshan legs	H	礼部尚書胡濬の上奏。右覺義に	○
"	"	(訳写西番字)番僧 參竹箭失 <bSam grub bkra shis	H	礼部尚書胡濬の上奏。都綱に	○
"	"	(訳写西番字番僧)答兒麻失里<Dharma shrī	H	礼部尚書胡濬の上奏。都綱に	○
205	景泰 2/6 乙酉(1451)	番僧 班丹眞真<dPal ldan rin chen	H	広済妙浄国師に	
222	景泰 3/10 丙申(1452)	浄修禪師 葛蔵(正統 5/4 などに既出)	A	烏思蔵に派遣していたところ朝貢使をともなって帰朝したため、国師に	
222	景泰 3/10 壬子(1452)	西天仏子大国師 班丹箭釈(洪熙 1/12 などに既出)	H	大智法王に	
223	景泰 3/11 乙亥(1452) ^{xiv}	番僧 禪師 葛蔵(正統 5/4 などに既出)	A	烏思蔵への使節行を賞して広善慈済国師に	
228	景泰 4/4 辛亥(1453)	灌頂大国師 沙加(正統 10/2 に既出)	H	西天仏子大国師に	

〃	〃	灌頂国師 鎖南釈刺(正統 8/5 などに既出)	H	灌頂大国師に	
230	景泰 4/6 壬辰(1453)	国師 班卓兒蔵ト(正統 10/2 に既出)	H	灌頂清心戒行大国師に	
231	景泰 4/7 己未(1453)	番僧 舍利蔵〔ト?〕<Shri bzang po?	H	都綱に	
〃	〃	(番僧)南渴領占<Nam mkha' rin chen	H	都綱に	
238	景泰 5/2 癸未(1454)	大隆善寺妙濟禪師綽巴箭矢の 侄 完ト失刺也失<mKhan po shes rab ye shes	H	おじの禪師号を襲替させる	
239	景泰 5/3 丙子(1454)	班竹兒蔵ト<dPal 'byor bzang po	H	灌頂広智弘善国師に	
〃	〃	箭思巴蔵ト<bKra shis dpal bzang po	H	灌頂弘教翊善国師に	
〃	〃	鎖南領占<bSod nams rin chen	H	灌頂浄修妙覚大国師に	
244	景泰 5/8 庚子(1454)	番僧 領占羅竹<Rin chen blo gros	H	禪師に	
〃	〃	(番僧)綽巴蔵ト<Chos dpal bzang po	H	禪師に	
〃	〃	刺麻 堅察領占<rGyal mtshan rin chen	H	都綱に	
257	景泰 6/8 乙丑(1455)	大国師 ^{xy} 鎖南領占(景泰 5/3 に既出)	H	印章・誥命などを授与	
267	景泰 7/6 癸丑(1456)	番僧 葛蔵(正統 5/4 などに 既出)	H	礼部尚書胡濙の上奏。灌頂広 善慈濟国師に	○
〃	〃	(番僧)烈蔵<Legs bzang	H	礼部尚書胡濙の上奏。静覚持 正国師に	○
〃	〃	(番僧)領占巴丹<Rin chen dpal ldan	H	礼部尚書胡濙の上奏。静覚佑 善国師に	○
〃	〃	(番僧)班卓兒堅參<dPal 'byor rgyal mtshan	H	礼部尚書胡濙の上奏。戒行禪 師に	○
〃	〃	(番僧)桑結遠丹<Sangs rgyas yon tan	H	礼部尚書胡濙の上奏。慈化禪 師に	○
〃	〃	(番僧)羅竹聰密<Blo gros mtshungs med	H	礼部尚書胡濙の上奏。翊善禪 師に	○
〃	〃	(番僧)堅參烈<rGyal mtshan legs	H	礼部尚書胡濙の上奏。妙覚禪 師に	○
〃	〃	(番僧)遠丹綽<Yon tan mchog	H	礼部尚書胡濙の上奏。静範禪 師に	○

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

	"	(番僧)領占三竹<Rin chen bsam grub	H	礼部尚書胡濙の上奏。清修禪 師に	○
	"	(番僧)羅竹筈失<Blo gros bkra shis	H	礼部尚書胡濙の上奏。崇善禪 師に	○
267	景泰 7/6 癸亥(1456)	大隆善寺灌頂国師西天仏子 沙加(正統 10/2 などに既出)	D	僧道の犯罪に対する還俗処分 の緩和を彼が請願。却下	
268	景泰 7/7 辛巳(1456)	西番 浄修弘智灌頂大国師 鎖南捨刺(正統 8/5 などに既 出)	H	浄修弘智灌頂大国師西天仏子 に	
	"	広通精修妙慧闡教西天仏子 大国師 沙加(正統 10/2 など に既出)	H	広通精修妙慧闡教弘慈大喜 (善?) ^{xvi} 法王に	
	"	刺麻 占巴失念<'Jam dpal bshes gnyen	H	崇修善道国師に	
	"	弘善妙濟(智?)国師 捨刺巴 (正統 8/5 に既出)	H	灌頂弘善妙智国師に	
271	景泰 7/10 己亥(1456)	番僧 筈失尾則児<bKra shis 'od zer	H	左覚義に	
	"	(番僧)班竹児星吉<dPal 'byor seng ge	H	左覚義に	
	"	(番僧)桑児結巴<Sangs rgyas dpal	H	右覚義に	
	"	(番僧)鎖南班卓児<bSod nams dpal 'byor	H	都綱に	
	"	(番僧)鎖南堅榮<bSod nams rgyal mtshan	H	都綱に	
	"	(番僧)鎖南捨刺<bSod nams shes rab	H	都綱に	
	"	(番僧)遠丹羅竹<Yon tan blo gros	H	都綱に	
	"	(番僧)鎖南筈<bSod nams grags	H	都綱に	
	"	(番僧)南葛蔵ト<Nam mkha' bzang po	H	都綱に	
272	景泰 7/11 戊辰(1456)	番僧 領占羅竹(景泰 5/8 に既 出)	H	番経写経により灌頂国師に	
	"	(番僧)綽巴蔵ト(景泰 5/8 に 既出)	H	番経写経により灌頂国師に	
	"	(番僧)捨(捨?)刺也失 <Shes' rab ye shes	H	番経写経により国師に	

"	"	(番僧)桑結遠丹(景泰 7/6 に既出)	H	番経写経により国師に	
"	"	(番僧)堅参利(景泰 7/6 に既出)	H	番経写経により国師に	
"	"	(番僧)羅竹聡密(景泰 7/6 に既出)	H	番経写経により国師に	
"	"	(番僧)羅竹扎失(景泰 7/6 に既出)	H	番経写経により国師に	
"	"	(番僧)遠丹綽(景泰 7/6 に既出)	H	番経写経により国師に	
"	"	(番僧)三竹扎失<bSam grub bkra shis	H	番経写経により禪師に	
"	"	(番僧)簇克林巴<rDzogs rim dpal	H	番経写経により右講経に	
"	"	(番僧)扎失兀則爾<bKra shis 'od zer	H	番経写経により右講経に	
"	"	(番僧)扎失巴<bKra shis dpal	H	番経写経により右講経に	
"	"	(番僧)堅参領占<rGyal mtshan rin chen	H	番経写経により左覚義に	
"	"	(番僧)昆令<Kun rin	H	番経写経により左覚義に	
"	"	(番僧)遠丹羅竹<Yon tan blo gros	H	番経写経により左覚義に	
"	"	(番僧)鎖南班丹<bSod nams dpal ldan	H	番経写経により都綱に	
"	"	(番僧)官綽領占<dKon mchog rin chen	H	番経写経により都綱に	
"	"	(番僧)錦墩堅参<...? rgyal mtshan	H	番経写経により都綱に	
"	"	(番僧)班丹藏ト<dPal ldan bzang po	H	番経写経により都綱に	
"	"	(番僧)交幹藏ト<...? bzang po	H	番経写経により都綱に	
"	"	(番僧)扎失三竹<bKra shis bsam grub	H	番経写経により都綱に	
"	"	(番僧)綽古領占<Chos kyi rin chen	H	番経写経により都綱に	
"	"	(番僧)公哥寧ト<Kun dga' snying po	H	番経写経により都綱に	

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

"	"	(番僧)端岳領占<Don yod rin chen	H	番經写經により、彼を含む五十二人を刺麻に	
『明英宗実録』(天順年間)					
275	天順 1/2 癸卯(1457)	弘慈大善法王 沙加(正統 10/2 などに既出)	E	景泰年間に与えられた法王号から灌頂大国師号にもどす	
"	"	灌頂大国師 班卓兒藏ト(正統 10/2 などに既出)	E	景泰年間に与えられた灌頂大国師号から国師号にもどす	
278	天順 1/5 癸未(1457)	灌頂国師 葛藏(正統 5/4 などに既出)	A	景泰 7 年に輔教王冊上の正使として彼を派遣したところ、途次において民を害する ^{xvii}	
"	"	右覚義 桑加巴<Sangs rgyas dpal(景泰 7/10 の「桑兒結巴」?)	A	上記の副使として派遣	
279	天順 1/6 戊申(1457)	番僧 鎮南綽卓兒<bSod nams chos 'byor	H	都綱に	
281	天順 1/8 戊申(1457)	大能仁寺左覚義 乃耶室哩<NayaŚrī	H	灌頂国師に	
282	天順 1/9 辛巳(1457)	灌頂国師 葛藏(正統 5/4 などに既出)	A	輔教王冊封の正使として派遣	
"	"	右覚義 桑加巴(天順 1/5 に既出)	A	上記の副使として派遣	
300	天順 3/2 丁丑(1459)	灌頂清心戒行国師 班卓兒藏ト(正統 10/2 などに既出)	H	誥命・印章・袈裟などを授与	
"	"	淨戒禪師 班丹笱思巴<dPa ldan bkra shis dpal	H	誥命・印章・袈裟などを授与	
308	天順 3/10 丁巳(1459)	右講經 笱実巴<bKra shis dpal	H	禪師に	
"	"	左覚義 班竹〔兒?〕星吉(景泰 7/10 に既出)	H	右講經に	
"	"	右覚義 乳奴班丹<gZhon nu dpal ldan	H	右講經に	
"	"	都綱 遠丹堅剌<Yon tan rgya mtsho	H	彼を含む五人を右覚義に	
"	"	刺麻 桑加藏ト<Sangs rgyas bzang po ^{xviii}	H	彼を含む十八人を都綱に	
315	天順 4/5 辛巳 (1460)	灌頂崇善普恵浄修弘智西天仏子大国師 鎮南釈刺(正統 8/5 などに既出)	G	彼が示寂。遣官致祭	

319	天順 4/9 甲戌 (1460)	西天仏子 鎖南釈刺(同上)	G	彼の示寂にともなう支給の停止をめぐって礼部官員らを処罰	▽
341	天順 6/6 戊寅 (1462)	故灌頂円妙広智大国師 端竹領占 (洪熙 1/6 に既出)	H	西天仏子に追封	
347	天順 6/12 戊寅 (1463)	浄覚慈濟大国師 鎖南領占 <bSod nams rin chen ^{xix}	F	京師に招聘。隆善寺に滞在させる	
354	天順 7/7 癸巳 (1463)	番僧 領占三竹<Rin chen bsam grub	H	浄慧禅師を襲替させる	
『明憲宗実録』					
36	成化 2/11 癸巳 (1467)	弘善妙慈灌頂大国師 札実巴 (天順 3/10 に既出)	H	誥命を授与	
39	成化 3/2 壬子 (1467)	大慈恩寺灌頂浄修弘治(智?) 国師 結列領占<dGe legs rin chen	B	彼が烏思藏に派遣した下記の刺麻らが帰朝したため、受け入れ	
"	"	刺麻 著旦領占<Chos ldan rin chen	B	上記の使節行から帰朝したことに対し、賞賜	
49	成化 3/12 辛丑 (1468)	番僧 法王 箭巴堅参(正統 2/8 などに既出)	H	陸叙。誥勅・印章を授与	
"	"	西天仏子 箭実巴 (天順 3/10 などに既出)	H	陸叙。誥勅・印章を授与	
"	"	国師 鎖南堅参<bSod nams rgyal mtshan	H	陸叙。誥勅・印章を授与	
"	"	(国師) 端竹也失<Don grub ye shes	H	陸叙。誥勅・印章を授与	
"	"	禅師 班竹〔児?〕星吉(景泰 7/10 などに既出)	H	陸叙。誥勅・印章を授与	
"	"	(禅師)礼(乳?)奴班丹(天順 3/10 に既出)	H	陸叙。誥勅・印章を授与	
50	成化 4/1 庚寅 (1468)	大慈恩寺西天仏子 箭実巴 (天順 3/10 などに既出)	G	彼が佃戸・常住田を請願。授与	
53	成化 4/4 辛丑 (1468)	番僧 都綱 堅榮列<rGyal mtshan legs	H	佑善衍教国師に	
"	成化 4/4 己酉 (1468)	番僧 阿咤哩<Ācarya ^{xx}	C	礼部尚書姚夔らの上奏。西山塔院修建を止め、彼を本土に帰還させる	

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

〃	成化 4/4 庚戌(1468)	西僧 𑖀𑖩𑖱𑖨𑖱𑖨𑖱𑖨 𑖀𑖩𑖱𑖨𑖱𑖨𑖱𑖨 (正統 2/8 などに既出)	H	万行莊嚴功德最勝智慧円明 能仁感応顕国光教弘妙大悟 法王西天至善金剛普濟大智 慧仏に	
〃	〃	(西僧) 箭実巴 (天順 3/10 などに既出)	H	清修正覺妙慈普濟護国衍教 灌頂弘善西天仏子大國師に	
〃	〃	(西僧) 鎖南堅参 (成化 3/12 に既出)	H	静修弘善国師に	
〃	〃	(西僧) 端竹也失 (成化 3/12 に既出)	H	淨慈普濟国師に	
58	成化 4/9 己巳(1468)	西天仏子 箭実巴 (天順 3/10 などに既出)	D	六科給事中魏元・十三道監察 御史康永韶らの上奏。彼の田 地を没収	
59	成化 4/10 庚戌(1468)	法王 𑖀𑖩𑖱𑖨𑖱𑖨𑖱𑖨 𑖀𑖩𑖱𑖨𑖱𑖨𑖱𑖨 (正統 2/8 などに既出)	F	礼部が番僧・不正漢民族僧問 題を提言。これに対して彼が 「陳請」。番僧問題を看過し た勅旨	▽
62	成化 5/1 庚辰(1469)	西僧 清心戒行国師 桑節遠 丹く…? yon tan	H	彼を含む七人に誥勅を授与	
81	成化 6/7 癸巳(1470)	大慈恩寺妙勝恵濟灌頂国師 班著爾藏ト<dPal ‘byor bzang po	H	印章を授与	
90	成化 7/4 甲辰(1471)	淨覺慈濟灌頂大國師 鎖南領 占(天順 6/12 に既出)	G	遣官論祭。工部に命じて建塔 し、葬る	
108	成化 8/9 庚戌(1472)	番僧 也舍堅察<Ye shes rgyal mtshan	H	崇教広化国師に	
111	成化 8/12 辛未(1473)	灌頂広善大國師 乃耶室哩 (天順 1/8 に既出)	G	祭葬を賜う	
112	成化 9/1 庚戌(1473)	大慈恩等寺法王 札実巴 (天順 3/10 などに既出)	H	誥勅・印章などを授与	
〃	〃	(大慈恩等寺) 灌頂大國師 端 竹也失 (成化 3/12 などに既 出)	H	誥勅・印章などを授与	
〃	〃	(大慈恩等寺) 灌頂大國師 班 著爾藏ト (成化 6/7 に既出)	H	誥勅・印章などを授与	
〃	〃	(大慈恩等寺) 国師 乳奴班丹 (天順 3/10 などに既出)	H	誥勅・印章などを授与	
〃	〃	(大慈恩等寺) 国師 加納失哩 <Jānaśrī	H	誥勅・印章などを授与	

118	成化 9/7 癸巳(1473)	大慈恩寺灌頂大国師 端竹也失(成化3/12などに既出)	A	彼を公事にて河州等处へ派遣。通事の同行を彼が請願したところ、認可	
"	"	(大慈恩寺)崇化大応法王 筈実〔巴?〕(天順 3/10 などに既出)	G	大慈法王塔院である陝西弘化寺の補修と寺僧に対する廩米支給等を彼が請願。認可	
125	成化 10/2 癸未(1474)	覚義 領占竹 ^{xxi} <Rin chen grub	H	灌頂大国師に	
"	"	(覚義)筈実蔵ト<bKra shis bzang po	H	灌頂国師に	
"	"	都綱 筈実堅剏<bKra shis rgya mtsho	H	国師に	
126	成化 10/3 庚子(1474)	大応法王 筈実巴(天順 3/10 などに既出)	G	彼が示寂。大慈法王の例にならって営葬。中官が造寺建塔を請願。工部の反対により建塔のみ勅許	▼
127	成化 10/4 癸未(1474)	弘慈広智灌頂大国師 領占竹(成化 10/2 に既出)	H	印章を授与	
136	成化 10/12 丙午(1475)	大慈恩寺仏子 端竹也失(成化 3/12 などに既出)	H	誥勅・印章を請願。授与	
"	"	(大慈恩寺)都綱 官著堅参 ^{xxii} <dKon mchog rgyal mtshan	H	誥勅・印章を請願。授与	
147	成化 11/11 庚午(1475)	妙覚浄範戒慧精修翊国崇教灌頂広善西天仏子大国師 端竹也失(成化 3/12 などに既出)	H	誥勅を授与	
150	成化 12/ 2 乙未(1476)	大能仁寺大悟法王 筈巴堅参(正統 2/8 などに既出)	G	茶・綵段などを陝西臨洮等処の僧に施与することを彼が請願。認可	
159	成化 12/11 癸卯(1476)	大隆善護国寺灌頂清心戒行国師 班卓兒蔵〔ト?〕(正統 10/2 などに既出)	H	太監黄賜の伝旨。灌頂大国師に	▼
"	"	大能仁寺覚義 結瓦領占<rGyal ba rin chen	H	太監黄賜の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺)覚義 鎖南捨辣<bSod nams shes rab	H	太監黄賜の伝旨。右講經に	▼
165	成化 13/4 辛亥(1477)	番僧 班卓兒端竹<dPal 'byor don grub	H	灌頂国師に	

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

		(番僧)完ト俄些児堅剎 <mKhan po 'od zer rgya mtsho	H	兄である領占端竹の国師号 を、彼に襲替させる	
172	成化 13/11 壬午(1477)	大慈恩寺仏子 領占竹(成化 10/2 などに既出)	H	印章授与を彼が請願。礼部・ 大学士商略らが「本土管事者」 にのみ支給すべきと反対する が、授与	▽
173	成化 13/12 癸卯(1478)	大能仁寺都綱 捨刺藏ト <Shes rab bzang po	A	彼が奉命して臨洮等処へ赴 き、帰朝。礼部の上奏によっ て賞賜	
		(大能仁寺) 静修弘善大国師 鎮(鎖?) 南堅参(成化 3/12 などに既出)	A		
176	成化 14/3 甲申(1478)	妙悟弘覚静修宗智闡範翊教 灌頂 善濟西天仏子大国師 鎖南堅参(同上?)	H	誥勅を授与	
179	成化 14/6 丁未(1478)	大慈恩寺禪師 喃渴領占 <Nam mkha' rin chen	H	彼が印章を請願。礼部の反対 にもかかわらず、授与	▽
194	成化 15/9 庚辰(1479)	禪師 結幹領占 <rGyal ba rin chen	H	太監李栄の伝旨。国師に	▼
196	成化 15/閏 10 庚午(1479)	僧録司覚義 綽吉堅参 <Chos kyi rgyal mtshan	A	烏思藏輔教王・闡化王・牛兒 寨行都司へ派遣。朝貢使をと もなって帰朝	
	成化 15/閏 10 丙子(1479)	大慈恩寺国師 乳奴班丹(天 順 3/10 などに既出)	H	太監李栄の伝旨。灌頂大国師 に	▼
		(大慈恩寺) 覚義 綽吉堅参 (成化15/閏10庚午に既出)	H	太監李栄の伝旨。国師に	▼
		大隆善護国寺灌頂大国師 班 卓見藏ト(正統 10/2 などに既 出)	H	太監李栄の伝旨。仏子に	▼
		(大隆善護国寺)国師 著乧領 占<Chos dpal rin chen	H	太監李栄の伝旨。灌頂国師に	▼
197	成化 15/11 辛卯(1479)	番僧 桑而結<Sangs rgyas	H	国師を襲替させる	
198	成化 15/12 戊午(1480)	(西天仏子)班卓児藏ト(正統 10/2 などに既出)	E	彼が他の番僧とともに印章 を請願するも、「本土管事者」 にのみ支給すべきとする礼 部の反対を容れて、却下	
	成化 15/12 壬申(1480)	大能仁寺右講經 衛巳(巴?) 宗奈<Grags pa? 'byung gnas	H	太監李栄の伝旨。国師に	▼

199	成化 16/1 戊申(1480)	弘修淨戒悟法輔教闡範善應 灌頂円妙西天仏子 大国師 班卓兒蔵ト(正統10/2などに 既出)	H	彼を含む八人に誥勅を授与	
215	成化 17/5 庚子(1481)	大能仁寺灌頂国師 結幹(幹?) 領占(成化 15/9 に既出)	H	灌頂大国師に	
220	成化 17/10 戊辰(1481)	大隆善護国寺西天仏子 班卓 〔兒?) 蔵ト(正統10/2などに 既出)	G	彼が示寂。官軍一千五百人を 発して建塔、治葬	
222	成化 17/12 戊申(1481)	大隆善護国寺禪師 筈石竹 <bKra shis grub	H	太監李栄の伝旨。国師に	▼
"	"	(大隆善護国寺)刺麻 班卓筈 失<dPal 'byor? bkra shis	H	太監李栄の伝旨。右覚義に	▼
"	"	(大隆善護国寺刺麻)鎖南倫 竹<bSod nams lhun grub	H	太監李栄の伝旨。都綱に	▼
"	成化 17/12 壬戌(1482)	番僧 万行清修真如自在広善 普慧弘度妙応掌教翊国正覚 大済法王西天円智大慈悲仏 領占竹(成化 10/2 などに 既出)	H	彼を含む十四人に誥命を授与	
227	成化 18/5 甲申(1482)	番僧 妙智通悟国師 永隆堅 參巴蔵ト<...? rgyal mtshan dpal bzang po	H	誥命を授与	
232	成化 18/9 丁酉(1482)	灌頂国師 著札領占(成化 15/閏 10 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。灌頂大国師 に	▼
"	"	覚義 達哩麻悉提 <Dharmasiddhi	H	太監覃昌の伝旨。講経に	▼
"	"	都岡(綱) 班麻筈失<Padma bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。覚義に	▼
"	"	(都綱)端竹筈失<Don grub bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。覚義に	▼
"	"	刺麻 公葛巴<Kun dga' dpal	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(刺麻)鎖南巴<bSod nams dpal	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(刺麻)三竹領占<bSam grub rin chen	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(刺麻)公葛汪秀<Kun dga' dbang phyug	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(刺麻)領占巴<Rin chen dpal	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

234	成化 18/11 甲辰(1482)	慈恩寺灌頂大国師 箭実堅剉 (成化 10/2 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。西天仏子に	▼
"	"	(慈恩寺灌頂大国師)乳奴班 丹(天順 3/10 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。西天仏子に	▼
235	成化 18/12 壬辰(1483)	刺麻 鎮南〔堅?〕剉<bSod nams rgya? mtsho	H	国師に	
236	成化 19/1 辛酉(1483)	大隆善護国寺国師 鎮南堅剉 (同上?)	H	誥命を授与	
"	"	大能仁寺灌頂大国師 結幹 鎮(領?)占(成化 15/9 などに 既出)	H	太監覃昌の伝旨。仏子に	▼
241	成化 19/6 戊辰(1483)	浄覚弘濟灌頂大国師 班竹児 藏ト<dPal 'byor bzang po	H	誥命を授与	
247	成化 19/12 庚辰(1484)	浄修正覚定戒妙応輔国闡教 灌頂慶善西天仏子大国師 箭実堅剉(成化 10/2 などに既 出)	H	彼を含む七人に誥勅を授与	
254	成化 20/7 庚寅(1484)	西番僧 清心戒行灌頂国師 鎮南堅剉(成化 18/12 などに 既出)	H	誥命を授与	
256	成化 20/9 丙戌(1484)	真覚寺 ^{xxiii} 講経 答児馬悉提 (成化 18/9 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。国師に	▼
"	"	(真覚寺)刺麻 麻尼星曷 <Ma ni seng ge	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(真覚寺刺麻) 納悉提<?	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
258	成化 20/11 丙戌(1484)	大慈恩寺西天仏子 箭失藏 ト(成化 10/2 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。法王に	▼
"	"	(大慈恩寺西天仏子)箭失堅 剉(成化 10/2 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。法王に	▼
"	"	(大慈恩寺西天仏子)乳奴班 丹(天順 3/10 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。法王に	▼
"	"	大能仁寺西天仏子 鎮南堅參 (成化 3/12 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。法王に	▼
"	"	(大能仁寺西天仏子)結幹領 占(成化 15/9 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。法王に	▼
"	"	大隆善護国寺灌頂大国師 著 札領占朵兒只巴<Chos dpal rin chen rdo rje dpal ^{xxiv}	H	太監覃昌の伝旨。西天大仏子 に	▼

"	"	大慈恩寺国師 緯吉堅参(成 化15/閏10などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。灌頂大国師 に	▼
"	"	(大慈恩寺)国師 堅剎星吉 〈rGya mtsho seng ge	H	太監覃昌の伝旨。灌頂国師に	▼
"	"	(大慈恩寺)禪師 班麻朵兒只 〈Padma rdo rje	H	太監覃昌の伝旨。国師に	▼
"	"	(大慈恩寺)禪師 札失班卓爾 〈bKra shis dpal 'byor	H	太監覃昌の伝旨。国師に	▼
"	"	(大慈恩寺)講經 真巴捨念 〈'Jam dpal bshes gnyen	H	太監覃昌の伝旨。国師に	▼
"	"	(大慈恩寺)講經 領占巴剌赤 羅竹 〈Rin chen …? blo gros	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大慈恩寺)覺義 札巴達丹 〈Grags pa yon tan	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大慈恩寺)覺義 荅兒麻三加 竹〈Dharma sangs rgyas grub	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大慈恩寺)都綱 領占班卓爾 〈Rin chen dpal 'byor	H	太監覃昌の伝旨。覺義に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 鎮南領占 〈bSod nams rin chen	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 鎮南陸竹 〈bSod nams blo gros	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 昨巴領占 〈rDzogs pa rin chen	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 乳奴也失 〈gZhon nu ye shes	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 喃渴陸竹 〈Nam mkha' blo gros	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 乳奴短竹 〈gZhon nu don grub	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 乳奴班丹 〈gZhon nu dpal ldan	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 昨巴短竹 〈rDzogs pa don grub	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 三加朵兒只 〈Sangs rgyas rdo rje	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺)刺麻 領占陸竹 〈Rin chen blo gros	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼

"	"	(大慈恩寺刺麻) 札失倫竹 <bKra shis lhun grub	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 班丹堅剌 <dPal ldan rgya mtsho	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 倫竹藏ト <lhun grub bzang po	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 領占藏ト <Rin chen bzang po	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 班丹陸竹 <dPal ldan blo gros	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 展羊領占 <'Jam dbyangs rin chen	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 鎮南札失 <bSod nams bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 陸竹札巴 <Blo gros grags pa	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 朵兒只官著 巴<rDo rje dkon mchog dpal	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 奔聶悉幹 <Puṇyaśiva?	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 札失遠丹 <bKra shis yon tan	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 乳奴堅剌 <gZhon nu rgya mtsho	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大慈恩寺刺麻) 遠丹札失 <Yon tan bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	大隆善護国寺刺麻 端竹羅卓 <Don grub blo gros	H	太監覃昌の伝旨。覺義に	▼
"	"	大能仁寺覺義 領占竹<Rin chen grub	H	太監覃昌の伝旨。講經に	▼
"	"	(大能仁寺) 都綱 鎮巴列<?	H	太監覃昌の伝旨。覺義に	▼
"	"	(大能仁寺都綱) 公葛 ^ツ 捨(?) 刺<Kun dga' shes? rab	H	太監覃昌の伝旨。覺義に	▼
"	"	(大能仁寺都綱) 結思念<?	H	太監覃昌の伝旨。覺義に	▼
"	"	(大能仁寺) 覺義 鎮南加 <bSod nams rgyal	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺覺義) 札巴藏播 <Grags pa bzang po	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼

	"	(大能仁寺)鎖南耶舍<bSod nams ye shes	H	太監覃昌の伝旨。講經に	▼
	"	(大能仁寺)都綱 鎖南班丹<bSod nams dpal ldan	H	太監覃昌の伝旨。覺義に	▼
	"	香盤寺都綱 綽吉領占(景泰 7/11に既出)	H	太監覃昌の伝旨。覺義に	▼
	"	(香盤寺)刺麻 領占札失<Rin chen bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
266	成化 21/5 壬戌(1485)	西僧 証覺夙慧清修妙悟翊国演教灌頂普善西天仏子大国師 捨刺星吉<Shes rab seng ge	H	彼と下記喃喝領占を含む八人に誥勅を授与	
	"	浄修広善灌頂大国師 喃喝領占(成化 14/6 に既出)	H	誥勅を授与	
	成化 21/5 丙子(1485)	大能仁寺大悟法王 筈巴堅参(正統 2/8 などに既出)	G	「迺西石岡寺」国師の灌頂国師陞叙を彼が請願。認可	
272	成化 21/11 辛酉(1485)	番僧 筈巴藏ト<Grags pa bzang po	H	彼を含む四人を灌頂大国師等に	
273	成化 21/12 己亥(1486)	番僧 班丹汪[出?] <dPal ldan dbang phyug?	H	彼を含む三十五人を西天仏子等に	
	成化 21/12 癸卯(1486)	刺麻 国師 筈思巴宗奈(成化 15/12 に既出)	H	番僧を度することを、彼が請願。礼部、成化 2 年の例にならって三千四百人を度することを上奏。チベット人であることを条件に勅許	○
	成化 21/12 乙巳(1486)	番僧 堅剌星吉(成化 20/11 に既出)	H	彼を含む五人を灌頂大国師・国師に	
276	成化 22/3 庚戌(1486)	大隆善護国寺禪師 班麻扎失(成化 18/9 に既出)	H	太監韋泰の伝旨。灌頂大国師に	▼
	"	(大隆善護国寺)覺義 端竹羅卓(成化 20/11 に既出)	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼
	"	(大隆善護国寺)刺麻 竹麻札失<…? bkra shis	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
	"	(大隆善護国寺刺麻)星吉班丹<Seng ge dpal ldan	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
	"	(大隆善護国寺刺麻)汪秀堅剌<dBang phyug rgya mtsho	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
277	成化 22/4 戊寅(1486)	大能仁寺灌頂大国師 筈巴藏播(成化 20/11 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。仏子に	▼
	"	(大能仁寺)国師 鎖南加(成化 20/11 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。灌頂国師に	▼

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

"	"	(大能仁寺)講經 鎮南班丹 (成化 20/11 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺)刺麻 鎮南朶只領 占<bSod nams rdo rje rin chen	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻)窩些領占 <'Od zer rin chen	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻)寧播盆剌巴 <sNying po phun tshogs pa	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
279	成化 22/6 丙申(1486)	西僧 広智通慧崇法普濟輔国 演教灌頂弘善西天仏子 大国 師 班丹汪出<dPal ldan dbang phyug(成化 21/12 に 既出?)	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)弘覚慈悲悟法妙応翊 化顯教灌頂隆善西天仏子 大 国師 卜刺加<?	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)清修演教灌頂 大国師 堅剌星吉(成化 20/11 などに 既出)	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)広利崇善灌頂 大国師 乳奴扎失<gZhon nu bkra shis	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)妙淨普濟灌頂 大国師 乳奴領占<gZhon nu rin chen	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)弘智通悟灌頂 大国師 班麻朶而只(成化 20/11 に既 出)	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)戒定善悟灌頂 大国師 扎失班著爾(成化 20/11 に 既出)	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)弘善妙慈国師 朶兒只 領占<rDo rje rin chen	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)慈修広化国師 三加竹 <Sangs rgyas grub	H	詰命を授与	
"	"	(西僧)智慧禪師 扎失短竹 <bKra shis don grub	H	彼を含む八人に勅命を授与	
283	成化 22/10 癸酉(1486)	灌頂 大国師 釈迦啞而塔 <Śakyārtha	H	太監韋泰の伝旨。西天仏子に	▼
"	"	禪師 津答室哩<Siddhaśrī?	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼

"	"	刺麻 麻の室哩<MatīsrI	H	太監韋泰の伝旨。覚義に	▼
"	"	国師 刺吒扎<?	H	太監韋泰の伝旨。大国師に	▼
"	成化 22/10 庚辰(1486)	大慈恩寺西天仏子 捨刺星吉 (成化 21/5 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。法王に	▼
"	"	大隆善護国寺西天仏子 著仏 領占朶而只巴(成化 15/閏10 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。法王に	▼
"	成化 22/10 壬午(1486)	大慈恩寺講経 領占孫ト<Rin chen …?	H	太監韋泰の伝旨。灌頂大国師 に	▼
"	"	(大慈恩寺)覚義 領占禪<Rin chen mchog	H	太監韋泰の伝旨。灌頂大国師 に	▼
"	"	(大慈恩寺)講経 囉納発刺 <Ratnapāla	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼
"	"	(大慈恩寺)戒師 公葛朶而只 <Kun dga' rdo rje	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼
"	成化 22/10 戊戌(1486)	灌頂大国師 班麻扎失(成化 18/9 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。仏子に	▼
"	"	灌頂国師 答兒麻悉提(成化 18/9 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。灌頂大国師 に	▼
"	"	大崇教寺兼住 ^{xxv} 禪師 綽藏領 占<Chos bzang rin chen	H	太監覃昌の伝旨。灌頂大国師 に	▼
"	"	(大崇教寺兼住)禪師 端竹札 失(成化 18/9 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。国師に	▼
"	"	(大崇教寺兼住 禪師)端竹羅 卓(成化 20/11 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。国師に	▼
"	成化 22/10 己亥(1486)	大慈恩寺灌頂大国師 喃渴領 占(成化 14/6 などに既出)	H	太監韋泰の伝旨。西天仏子に	▼
"	"	(大慈恩寺灌頂大国師)星吉 藏ト<Seng ge bzang po	H	太監韋泰の伝旨。西天仏子に	▼
"	"	(大慈恩寺)禪師 参加班丹 <Sangs rgyas dpal ldan	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼
"	"	(大慈恩寺禪師)星吉扎失 <Seng ge bkra shis	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼
"	"	(大慈恩寺)都綱 喃渴扎失 <Nam mkha' bkra shis	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼
"	"	(大慈恩寺都綱)鎮南藏ト <bSod nams bzang po	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼
"	"	(大慈恩寺)覚義 捨刺扎失 <Shes rab bkra shis	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼
284	成化 22/11 丙午(1486)	大能仁寺灌頂国師 鎮南加 (成化 20/11 などに既出)	H	太監覃昌の伝旨。灌頂大国師 に	▼

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

〃	〃	(大能仁寺)講經 領占竹(成化 20/11 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。灌頂大国師に	▼
〃	〃	(大能仁寺)覺義 公葛捨刺(成化 20/11 に既出)	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
〃	〃	(大能仁寺)都綱 結敦領占 〈dGe 'dun rin chen	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
〃	〃	(大能仁寺)刺麻 羅丹扎失 〈Rab brtan bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)倫竹堅參 〈lHun grub rgyal mtshan	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)沙加鎖南 〈Shākya bsod nams	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)領占堅剌 〈Rin chen rgya mtsho	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)公葛扎失 〈Kun dga' bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)羅竹堅參 〈Blo gros rgyal mtshan	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)公葛領占 〈Kun dga' rin chen	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)爾麻堅參 〈Nyi ma rgyal mtshan	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)公葛綽 〈Kun dga' mchog	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)乳奴班丹 〈gZhon nu dpal ldan	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)領占扎 〈Rin chen grags	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)扎失朶只 〈bkra shis rdo rje	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)領占綽 〈Rin chen mchog	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)捨刺札失 〈Shes rab bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)鎖南倫卜 〈bSod nams lhun po	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)領占汪秀 〈Rin chen dbang phyug	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)參竹堅參 〈bSam grub rgyal mtshan	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼

"	"	(大能仁寺刺麻) 箭実遠丹 <bKra shis yon tan	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻) 鎖南巴藏 <bSod nams dpal bzang	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻) 藏ト領占 <bZang po rin chen	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻) 藏ト捨刺 <bZang po shes rab	H	太監覃昌の伝旨。都綱に	▼
"	成化 22/11 戊申 (1486)	大能仁寺禪師 公葛堅参 <Kun dga' rgyal mtshan	H	太監覃昌の伝旨。灌頂大国師に	▼
"	"	(大能仁寺) 都綱 桑加星吉 <Sangs rgyas seng ge	H	太監覃昌の伝旨。国師に	▼
"	"	(大能仁寺都綱) 謹敦堅剉 <dGe 'dun rgya mtsho	H	太監覃昌の伝旨。国師に	▼
"	"	(大能仁寺) 刺麻 端竹堅剉 <Don grub rgya mtsho	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻) 星吉藏ト <Seng ge bzang po	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻) 参丹札失 <bSam gtan bkra shis	H	太監覃昌の伝旨。禪師に	▼
"	成化 22/11 丁卯 (1486)	故西天仏子 端竹領占 (洪熙 1/6 などに既出)	H	太監韋泰の伝旨。法王に追封。賜祭	▼
"	"	大能仁寺覺義 鎖巴列 (成化 20/11 に既出)	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺) 都綱 札失堅参 <bKra shis rgyal mtshan	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺都綱) 領占巴 (成化 18/9 に既出)	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺都綱) 堅剉札失 <rGya mtsho bkra shis	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺都綱) 公葛端竹 <Kun dga' don grub	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼
"	"	(大能仁寺) 刺麻 那ト堅参 <Nor bu rgyal mtshan	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻) 掌出班丹 <Byang chub dpal ldan	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻) 札失班丹 <bKra shis dpal ldan	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
"	"	(大能仁寺刺麻) 札失倫竹 <bKra shis lhun grub	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

〃	〃	(大能仁寺刺麻)遠丹宗奈 〈Yon tan ‘byung gnas	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)捨刺羅竹 〈Shes rab blo gros	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)班丹端竹 〈dPal ldan don grub	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)扎巴藏ト 〈Grags pa bzang po	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)結列扎失 〈dGe legs bkra shis	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)班丹堅參 〈dPal ldan rgyal mtshan	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)班丹扎失 〈dPal ldan bkra shis	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)端竹扎失 〈Don grub bkra shis	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)喃渴鎖南藏 ト〈Nam mkha’ bsod nams bzang po	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)短竹遠丹藏 播〈Don grub yon tan bzang po	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)朶而只巴藏 ト〈rDo rje dpal bzang po	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	(大能仁寺刺麻)扎失桑加遠 丹〈bkra shis sangs rgyas yon tan	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
〃	〃	西天仏子大國師 班單兒藏 ト(成化6/7などに既出)	H	印章を授与	
〃	成化22/11己巳(1486)	西天仏子 ト刺加(成化22/6 に既出)	H	太監韋泰の伝旨。法王に	▼
〃	〃	国師 班丹端竹〈dPal ldan don grub	H	太監韋泰の伝旨。灌頂大國師 に	▼
〃	〃	講經 捨刺扎〈Shes rab grags	H	太監韋泰の伝旨。国師に	▼
〃	〃	都綱 也失巴〈Ye shes dpal	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼
〃	〃	(都綱)公葛星ト〈Kun dga’ …?	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼
〃	〃	(都綱)端竹班著而〈Don grub dpal ‘byor	H	太監韋泰の伝旨。禪師に	▼

		刺麻 南渴藏ト<Nam mkha' bzang po	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
		(刺麻)班麻星吉<Padma seng ge	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
		(刺麻)端竹捨刺<Don grub shes rab	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
		(刺麻)官著領旨(占? ^{xxvi})<dKon mchog rin chen?	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
		(刺麻)展羊端竹<'Jam dbyangs don grub	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
		(刺麻)鎖南窩子而<bSod nams 'od zer	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
		(刺麻)土巴領占 <…? rin chen	H	太監韋泰の伝旨。都綱に	▼
285	成化 22/12 丁亥(1487)	崇修悟法広慧覺善光梵顯教灌頂妙応西天仏子大國師 扎巴藏播(成化 20/11 などに既出)	H	彼を含む八人に誥勅を授与	
287	成化 23/2 丙子(1487)	太能仁寺都綱 奔聶干塔<Puṇya…?	H	太監韋泰の伝旨。覺義に	▼
290	成化 23/5 庚戌(1487)	西僧 円明通慧普慈真乘弘覺利 ^{xxvii} 教灌頂崇善西天仏子大國師 刺瓦衛(成化 22/10 に既出)	H	彼を含む十二人に誥勅を授与	
『明孝宗実録』					
2	成化 23/9 丁未(1487)	法王 領占竹(成化 10/2 などに既出)	D	礼科等科給事中韓重・監察御史陳穀らが彼の奢侈専横を弾劾。これを容れて礼部による処理を命ず ³⁸	
		(法王) 扎巴堅参(正統 2/8 などに既出)	D		
		仏子 釈迦啞兒答(成化 22/10 に既出)	D		
		国師 捨刺星吉(成化 21/5 などに既出)	D		
		(仏子) 著乩領占(成化 15/閏 10 などに既出)	D		
22	弘治 2/1 丙寅(1489)	西僧 鎮南堅参(成化 3/12 などに既出)	E	弾劾を受けて彼みずから法王から国師に降格	

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

	"	西僧 鎮南堅参(同上)	F	その徒の請願により、彼の能仁寺滞在を勅許	
28	弘治 2/7 己巳(1489)	番僧 鎮南堅参(同上)	F	礼科都給事中韓重・監察御史荊欽らによって彼の放逐が上奏されるも、却下	▽
48	弘治 4/2 丁巳(1491)	(番僧)乳奴班丹(天順 3/10 などに既出)	F	番僧追放がおこなわれたが、彼を含む十五人の番僧に対しては留京を許可	
69	弘治 5/11 甲申(1492)	大慈恩寺番僧 国師 乳奴班丹(同上)	E	示寂。その甥による称号襲替を却下	
"	"	大慈恩寺番僧 国師 乳奴班丹(同上)	D	彼の死にともなう建塔葬祭の請願を却下	
"	"	大慈恩寺番僧 国師 乳奴班丹(同上)	H	彼の死にともない法王号を追贈	
108	弘治 9/1 壬午(1496)	灌頂大国師 筈巴堅参(正統 2/8 などに既出 ^{xxviii})	H	伝旨。西天仏子に	▼
"	"	国師 釈迦啞而塔(成化 22/10 などに既出)	H	伝旨。西天仏子に	▼
134	弘治 11/2 乙未(1498)	大能仁寺右覚義 塔兒麻拶耶<Dharmajaya	H	伝旨。左覚義に。西域寺兼住とする	▼
"	"	(大能仁寺)都綱 麻兒葛思帖羅<Margasthira?	H	伝旨。彼を含む四人を右覚義に。西竺等寺兼住とする	▼
151	弘治 12/6 丙辰(1499)	大隆善護国寺国師 著札領占(成化 15/閏 10 などに既出)	H	西天仏子に	
155	弘治 12/10 戊申(1499)	大能仁寺等灌頂国師 那卜堅参(成化 22/11 に既出)	G	清寧宮が成り、彼らに落慶法要をさせたことを大学士劉健らが諫奏。対して反駁の勅旨	▽
160	弘治 13/3 甲子(1500)	故西天仏子 著札領占(成化 15/閏 10 などに既出)	G	彼のための造塔を命ず。これに対する工部尚書徐貫の諫奏を却下	▽
172	弘治 14/3 己巳(1501)	国師 領占竹(成化 10/2 などに既出)	F	四川からの来京を、彼が請願。礼部の反対にもかかわらず認可	▽
181	弘治 14/11 辛丑(1502)	大能仁寺右覚義 麻的室哩(成化 22/10 に既出)	H	伝旨。灌頂大国師 ^{xxix} に	▼
"	"	(大能仁寺)左覚義 塔而麻拶耶(弘治 11/2 に既出)	H	伝旨。灌頂大国師に	▼
182	弘治 14/12 丁未(1502)	大慈恩寺灌頂国師 班丹達丹<dPal ldan yon tan	G	彼が示寂。その徒が祭葬を請願。礼部の反対にもかかわらず葬	▽

"	弘治 14/12 丁巳(1502)	大隆善護国寺国師 朶而只巴 ^{xxx} <rDo rje dpal	H	伝旨。尙(西?)天弗(仏?)子に	▼
186	弘治 15/4 丁卯(1502)	四川彭果光相寺寄住番僧 国師 領占竹(成化 10/2 などに既出)	F	勅命により四川から招聘して慈恩寺に滞在させる。礼部尚書張昇らが帰還させるよう上奏するも、却下	▽
188	弘治 15/6 甲寅(1502)	妖僧 領占竹(同上)	D	戸部員外郎陳仁が彼を弾劾。その奏を所司に下す	
"	弘治 15/6 庚午(1502)	釈伽啞[而?]塔(成化 22/10 などに既出)	D	彼の像 ^{xxxi} に御製の贊を与えることに反対して、内閣大学士劉健らが諫奏。奏を容れる	
『明武宗実録』					
1	弘治 18/5 壬子(1505)	西番 灌頂大国師 那ト堅参(成化 22/11 などに既出)	E	礼部尚書張昇らの弾劾を容れ、礼部・吏部合議のうえ、彼を含む六人を禪師に降格して僧録司に閑住させる	
"	"	(西番 灌頂大国師)班羅羅竹(成化 20/11 に既出)	E	"	
2	弘治 18/6 戊寅(1505)	那ト堅参(成化 22/11 などに既出)	D	彼らが左道により進用されて蓄財したとして、戸部尚書韓文が弾劾。弾劾を受理。ただし処分は済んだとの勅旨	
24	正徳 2/3 癸亥(1507)	大慈恩寺禪師 領占竹(成化 10/2 などに既出)	H	太監李榮の伝旨。灌頂大国師に	▼
"	"	大能仁寺禪師 麻的室哩(成化 22/10 などに既出)	H	太監李榮の伝旨。国師に	▼
"	"	(大能仁寺禪師)塔而麻拶耶(弘治 11/2 などに既出)	H	太監李榮の伝旨。国師に	▼
"	"	(大能仁寺禪師)那ト堅参(成化 22/11 などに既出)	H	太監李榮の伝旨。国師に	▼
"	"	大隆善護国寺禪師 著肖藏ト <Chos shes bzang po	H	太監李榮の伝旨。国師に	▼
29	正徳 2/8 乙亥(1507)	大慈恩寺都綱 筈巴也失 <Grags pa ye shes	A	贊善王冊封の正使に。贊善王の使臣および礼部が使節団人数の補填を上奏。勅許	
"	"	大能仁寺都綱 鎖南短竹 <bSod nams don grub	A	上記使節団の副使に	
53	正徳 4/8 癸亥(1509)	大隆善護国寺国師 著肖藏ト(正徳 2/3 に既出)	H	司礼監の伝旨。法王に	▼

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

"	"	(大隆善護国寺)刺麻 羅竹班卓 <Blo gros dpal 'byor?	H	司礼監の伝旨。左覚義に	▼
"	"	(大隆善護国寺刺麻)班丹端竹 <dPal ldan don grub	H	司礼監の伝旨。左覚義に	▼
"	"	(大隆善護国寺刺麻)班卓羅竹 <dPal 'byor? blo gros	H	司礼監の伝旨。左覚義に	▼
"	"	(大隆善護国寺刺麻)朵而只堅 參<dDo rje rgyal mtshan	H	司礼監の伝旨。左覚義に	▼
62	正徳 5/4 戊戌(1510)	大能仁寺国師 那ト堅參(成化 22/11 などに既出)	H	法王に	
"	"	(大能仁寺)禪師 筭巴藏播(成 化 20/11 などに既出)	H	法王に	
"	"	(大能仁寺)都綱 那ト領占 <Nor bu rin chen	H	仏子に	
"	"	(大能仁寺都綱)公葛端竹(成 化 22/11 に既出)	H	禪師に	
"	"	(大能仁寺都綱)堅剌扎失(成 化 22/11 に既出)	H	禪師に	
"	"	大隆善護国寺刺麻 綽即羅竹 <Chos rje blo gros	H	仏子に	
"	"	大慈恩寺国師 乳奴領占(成 化 22/6 に既出)	H	西天仏子に	
"	"	(大慈恩寺)革職国師 捨(捨?) 刺扎(成化 22/11 に既出)	H	仏子に	
"	"	(大慈恩寺)刺麻 也舍窩<Ye shes 'od	H	禪師に	
64	正徳 5/6 壬辰(1510)	大隆善寺禪師 星吉班丹(成 化 22/3 に既出)	H	国師に	
"	"	(大隆善寺)左覚義 羅竹班卓 (正徳 4/8 に既出)	H	禪師に	
"	"	(大隆善寺)刺麻 乚竹<dPal grub	H	左覚義に	
"	"	(大隆善寺刺麻)三竹捨刺 <bSam grub shes rab	H	右覚義に	
"	"	(大隆善寺刺麻)倫竹堅參 <lHun grub rgyal mtshan	H	都綱に	
"	"	大慈恩寺仏子 乳奴領占(成 化 22/6 などに既出)	H	法王に	

"	"	(大慈恩寺仏子)捨刺扎(成化 22/11 などに既出)	H	法王に	
"	"	(大慈恩寺)刺麻 捨刺星吉(成化 21/5 などに既出)	H	仏子に	
"	"	(大慈恩寺刺麻)也失短竹<Yeshes don grub	H	禪師に	
"	"	大能仁寺刺麻 領占播<Rinchen dpal	H	都綱に	
"	正徳 5/6 庚子(1510)	大慶法王西天覚道円明自在大定慧仏 ^{xxxii}	H	左記は武宗自身。印章を鋳造。みずからに誥命を授与	
65	正徳 5/7 己卯(1510)	大隆善護国寺国師 星吉班丹(成化 22/3 などに既出)	H	仏子に	
"	"	(大隆善護国寺)禪師 班卓羅竹(正徳 4/8 に既出)	H	仏子に	
"	"	(大隆善護国寺)禪師 羅竹班卓(正徳 4/8 などに既出)	H	国師に	
"	"	(大隆善護国寺禪師)班丹端竹(正徳 4/8 に既出)	H	国師に	
"	"	(大隆善護国寺禪師)朵而只堅参(正徳 4/8 に既出)	H	国師に	
"	"	大慈恩寺乳奴星吉<gZhon nu seng ge	H	禪師に	
"	"	(大慈恩寺)領占羅竹(成化 20/11 に既出)	H	禪師に	
"	"	真覚寺刺麻 牟尼星曷<Mu ni seng ge	H	右覚義に	
"	"	(真覚寺刺麻)的竹了革 ^{xxxiii} <Tejo'rka?	H	国師に	
68	正徳 5/10 庚寅(1510)	国師 羅竹班卓(正徳 4/8 などに既出)	H	灌頂大国師に	
"	"	(国師)班丹端竹(正徳 4/8 などに既出)	H	灌頂大国師に	
"	"	禪師 領占陸竹(成化 20/11 などに既出)	H	国師に	
"	"	右覚義 短竹監参<Don grub rgyal mtshan	H	左覚義に	
"	"	刺麻 祥巴汪秀<'Jam dpal dbang phyug	H	右覚義に	
"	"	(刺麻)扎失朵而只<bKra shis rdo rje	H	右覚義に	

乙坂 明代留京チベット仏教僧序論

	〃	(刺麻)寧ト鎖南短竹<sNying po bsod nams don grub	H	右覺義に	
	〃	(刺麻)星吉班卓<Seng ge dpal ‘byor?	H	右覺義に	
	〃	(刺麻)鎖南星吉<bSod nams seng ge	H	右覺義に	
	〃	(刺麻)班丹倫竹<dPal ldan lhun grub	H	右覺義に	
76	正徳 6/6 己卯(1511)	大慈恩寺大悟法王 捨刺札 ^{ツツ} (成化 22/11 などに既出)	G	彼が示寂。工部に命じて營葬	
	〃 正徳 6/6 庚寅(1511)	大慈恩等寺都綱 筍巴也失 (正徳 2/8 に既出)	A	贊善王冊封使として彼を派遣していたところ、帰朝。賞賜	
85	正徳 7/3 己未(1512)	故西天仏子 捨刺星吉(成化 21/5 などに既出)	G	營葬	
95	正徳 7/12 丙午(1513)	大慈恩寺僧 三竹班丹<bSam grub dpal ldan	A	贊善王冊封使として彼を派遣していたところ、帰朝。陞叙	
97	正徳 8/2 辛亥(1513)	大隆善護国寺大慶法王 領占班丹<Rin chen dpal ldan (正徳 5/6 に既出)	G	左記は武宗自身。陝西で仏事を営むとして求賞。礼部は無例であると上奏するが、詔して特に授与	▽
99	正徳 8/4 己酉(1513)	大慈恩寺番僧 乳奴領占(成化 22/6 などに既出)	G	慈恩寺方丈の修築を、彼が請願。工部・兵部・錦衣衛により施工	
105	正徳 8/10 丁酉(1513)	大慈恩寺灌頂大國師 也舍窩 (正徳 5/4 に既出)	G	彼が示寂。工科給事中・工部の反対にもかかわらず工部に造塔營葬させ、しかもこれを例とする勅命	▽
106	正徳 8/11 辛未(1513)	大慶法王 領占班丹(正徳 5/6 などに既出)	G	左記は武宗自身。番行童度牒三千の発給権を自身が保有	
121	正徳 10/2 戊戌(1515)	保安寺大徳法王 絳吉我些兒<Chos kyi ‘od zer	F	彼はもと鳥思藏からの使節。武宗によって留められ、寵愛を受けて豹房に出入りする	
125	正徳 10/5 辛亥(1515)	大善法王 星吉班丹(成化 22/3 などに既出)	G	その徒が彼の營葬を請願。礼部の反対にもかかわらず認可。工部からの支出を命ず	▽
164	正徳 13/7 丙午(1518)	大護国保安寺番僧 覺義 領占筍巴<Rin chen grags pa	A	彼を闡教王冊封の正使に。戸科・戸部の反対にもかかわらず多大な路資を支給。使節行の往路において暴挙	

『明世宗実録』					
4	正徳 16/7 乙亥(1521)	刺麻 禪師 領占筈巴 ^{xxxiv} (同上)	C	札部による弾劾の対象の一人に。死罪を減ぜられて辺境にて充軍	
526	嘉靖 42/10 癸丑(1563)	番僧 遠丹班麻<Yon tan padma	A	闡化王冊封の正使に。往来にあたり騷擾。札部の上奏を容れ、以後「京寺番僧」を冊封使としないこととする	
『明神宗実録』					
30	万暦 2/10 甲子(1574)	番僧 覺義 札巴<Grags pa	A	山西巡撫方逢時の上奏。順義王アルタンに経典を届けた功績により禪師に	
〃	〃	(番僧)都綱 班麻<Padma	A	上記の功績により覺義に	
35	万暦 3/2 乙未(1575)	番僧 堅参札巴<rGyal mtshan grags pa	A	アルタンの要請により、彼を含む四人の番僧派遣を決定	
47	万暦 4/2 辛卯(1576)	番僧 堅参扎把(同上)	A	上記の僧たちを送り出す	
111	万暦 9/4 庚申(1581)	番僧 堅参札巴(同上)	A	上記の僧たちがアルタンのもとから帰朝	
116	万暦 9/9 庚寅(1581)	番僧 堅参札巴(同上)	A	アルタンとの間の上記の使節行に対して、彼を含む四人に賞賜	
256	万暦 21/1 戊辰(1593)	番僧 領占班麻<Rin chen padma	A	札部尚書羅万化の上奏。アルタンの要請により、彼を含む四人を番経携行のうえ派遣	
『明熹宗実録』					
73	天啓 6/閏 6 乙丑(1626)	(十方庵 ^{xxxv})大西天羅漢 噴哈嗎く?	F	女直か、との疑いにより捕縛するが、「西番」と判明	
77	天啓 6/10 壬子(1626)	喇嘛僧 鎖南<bSod nams	A	遼東巡撫袁崇煥が彼を内偵として女直に送りこむ	
79	天啓 6/12 辛亥(1627)	喇嘛僧 李鎖南(同上)	A	彼をとおして女直の状況がもたらされる	

〈表 1〉 参考文献

- ・新宮学[2004年]
- ・佐藤長[1986年]
- ・顧祖成・王観容・瓊華・季垣垣・呂煥祥・彭遐熙・侯躍生編[1982年・1985年]
- ・何孝栄[2007年]
- ・黄顯[1987年]
- ・李志明・索南旺母[2022年]
- ・王貴[1991年]

〈表1〉注

i 原則的に、本文に記した①②の条件を満たす人物を留京チベット仏教僧として採る。なお、その採録基準に一見合致するようではあっても、除外すべき事例が少なからず存在する。以下にその主なものを挙げる。

- ・『明宣宗実録』には、チベットからの使節に対して京師に屋敷を与えたとする四件の記事が見える。いずれも発出母体は「闡教王」「闡化王」「贊善王」という俗権五王のうちの三王とされていること、使節自身も「番僧」などの肩書をもたず、俗人と見られることから、表からは除外する。次の四件である。『明宣宗実録』巻65宣德5年4月壬午条に見える闡教王の使者「鎖〔南?〕扎失思」、『同前』巻67宣德5年6月丁酉条に見える闡化王所部からの使者「三扎^{ツァ}（「明宣宗実録巻六十七校勘記」によれば、この「扎」を、抱本は「札」と記すと言う）思」および「□□□必刺哈」ら、『同前』巻70宣德5年9月癸亥条に見える闡化王からの使臣「孫竹」、『同前』巻104宣德8年8月己酉条に見える贊善王からの使者「筩失監蔵」。
- ・『明宣宗実録』巻107宣德8年11月乙巳条の「罕東衛番人納麻失加」らは京師在住を許されているが、出身母体および「番人」という表記から見て僧侶とは考えにくいため、除外する。
- ・『明英宗実録』巻95正統7年8月乙卯条で「崇教弘善国師」とされている「班卓兒端竹」は、『同前』巻130正統10年6月乙巳条に「西番」「靈蔵」「烏思蔵」の人物とともに遣使朝貢した「崇教弘善国師班卓兒端竹」として記されているため、チベット在住の人物と見なし、除外する。
- ・『明英宗実録』巻102正統8年3月丙辰条には「喃葛蔵ト姪領占蔵ト」「綽失児堅祭姪簇克林堅參」として四人の名が記されるが、『同前』巻97正統7年10月丙辰条、および『同前』巻101正統8年2月辛亥条から、「喃葛蔵ト」が西寧瞿曇寺僧であることが明らかであるため、いずれも辺境のチベット仏教僧と見なし、除外する。
- ・『明英宗実録』巻102正統8年3月辛未条の「簇克林巴蔵」は、彼の「灌頂弘教翊善国師」という称号が、その弟と見られる「西番淨戒寺国師弟筩思巴蔵ト」に襲替されている（『明英宗実録』巻251景泰6年3月丙午条）ため、兄弟ともに「西番」の仏寺の所屬と見なし、除外する。
- ・『明英宗実録』巻124正統9年12月壬戌条で国師号を与えられている「鎖南筩」は、一年以内に朝貢記事がないが、それ以前において三度にわたり（『明宣宗実録』巻60宣德4年12月戊子条（ここでは「鎖南

- 札」)・『明英宗実録』巻17正統元年5月癸酉条・『同前』巻95正統7年8月乙卯条)大宝法王の使臣として入貢している人物であるため、今回も同様であったと考え、留京者からは除外する。
- ・『明英宗実録』巻126正統10年2月乙巳条の「私^{ママ}(弘?)慈広善国師」とされた「鎖南蔵ト」は、『同前』巻239景泰5年3月丙寅条および『同前』巻264景泰7年3月甲戌条によって岷州崇教寺の僧であると考えられるため、除外する。
 - ・『明英宗実録』巻129正統10年5月丙戌条の「清修翊善国師簇克林巴」は、『同前』巻95正統7年8月丁巳条および『同前』巻109正統8年10月癸未条から四川の仏寺の僧であると推測されるため、除外する。また同じく正統10年5月丙戌条に記される「端竹」「遠丹幹^{ママ}(幹?)些児」も、この「簇克林巴」とともに賜号されているため、同様に辺境のチベット仏教僧であったと見なし、除外する。
 - ・『明英宗実録』巻135正統10年11月戊子条で「国師」とされている「鎖南筭思」は、『同前』巻172正統13年11月辛亥条の「陝西香徳寺国師鎖南筭思」なる辺境チベット仏教僧である可能性があるため、除外する。
 - ・『明英宗実録』巻178正統14年5月辛巳条で「禪師」とされている「鎖南堅榮」は、『明憲宗実録』巻125成化10年2月甲戌条で「烏思蔵答都寺」の「禪師鎖南堅榮」と同一人物である可能性があるため、除外する。
 - ・『明憲宗実録』巻20成化元年8月戊戌条が記す「且答児黒巴」への「国師」号授与は、「番簇」の要請によって、彼の兄の国師号を襲替した結果である。よって辺境のチベット仏教僧に対する勅命と見なし、除外する。
 - ・『明憲宗実録』巻93成化7年7月丙申条に「怕思巴領占巴蔵ト」に「大国師」号を襲替させたことあるものは、『同前』巻103成化8年4月甲午条および『明孝宗実録』巻87弘治7年4月戊寅条から、四川辺境に位置する尊勝等寺の「清修翊善大国師怕思巴領占巴蔵ト」に対する勅命と見なし、除外する。
 - ・『明世宗実録』巻43嘉靖3年9月甲子条の「通慧浄覚国師完ト鎖南列思巴」への詔命授与は、『同前』巻38嘉靖3年4月癸丑条によって、「完ト鎖南列思巴」の所属する厳教寺が辺境の寺院であると推測されるため、除外する。
 - ・『明熹宗実録』巻56天啓5年2月丁未条に兵部郎中を「遣」わして「西

- 僧喇嘛王桑吉叭藏」らに勅命・賜与品を授けたとある。官員を「遣」わした、とわざわざ記しているため留京者ではないと見なし、除外する。
- ii 表中、永楽2年・4年の時点では成祖は応天府におり、13年・17年には順天府に滞在している（新宮学[2004年]183頁）。
 - iii その人物がすでに本表に挙げられている可能性がある場合、覚え書きとして「既出」と記した。ただし「既出」とあっても別人である事例、また逆に、「既出」としていない場合でも同一人物をすでに表中に採っている事例もあると推測される。とはいえ〈表1〉〈表2〉ともに、対象となった留京チベット仏教僧ののべ人数を調べるためのものであるため、大きな支障はないと考える。
 - iv 明らかにパンディタであって固有名詞ではないが、この前後に個人名が記されていないため、この語のみを記す。
 - v この「端竹領占」が、『明太宗実録』巻33永楽2年8月癸巳条の「丹竹領占」・『同前』巻59永楽4年9月壬戌条の「端行（竹？）領占」と同一人物であるか否かは判断がつかない。
 - vi この「班丹札失」は、『明宣宗実録巻十二校勘記』にしたがった。
 - vii 同日、阿木葛のほかにも数人のチベット仏教僧が陞叙されているが、彼らについては朝貢使節と見なし、留京者とは考えない。これに対して阿木葛のみは、宣宗の教誡師とされたこと（佐藤長[1986年]207頁）や、慈恩寺に所属すること（『明英宗実録』巻79正統6年5月甲寅条）が明らかであるため、この時点から留京チベット仏教僧として扱う。
 - viii この時点で「行在」の名称が冠されている官署は順天府のそれである（新宮学[2004年]328頁・379頁）。
 - ix この「沙加」は、これ以前、『明宣宗実録』巻60宣德4年12月戊寅条・『同前』同年同月甲申条・『明英宗実録』巻98正統7年11月戊午条にも記されるが、これら三件は岷州の僧としての朝貢・回賜の記事であるため、除外する。
 - x 「烏思藏」の地名が冠されているが、この人物は、烏思藏^{マサヤ}の闡化王への冊封使として派遣された、として先に登場しており（『明英宗実録』巻66正統5年4月壬午条）、留京チベット仏教僧と考えられる。
 - xi 前月の記事（『明英宗実録』巻143正統11年7月戊辰条）とはほぼ重複する。
 - xii 前月の記事（『明英宗実録』巻182正統14年9月己卯条）とはほぼ重複する。禪師号が具体的に記されている点、9月己卯条には見える都綱職拝受者に触れられていない点が異なるのみである。
 - xiii この「西番字」は、『明英宗実録巻一百九十一校勘記』にしたがった。同

日下欄二箇所も同じ。

- xiv 前月の記事（『明英宗実録』巻222景泰3年10月丙申条）とはほぼ重複する。国師号が具体的に記されている点などが異なるのみである。
- xv この「大国師」は、「明英宗実録巻二百五十七校勘記」にしたがった。
- xvi 「明英宗実録巻二百六十八校勘記」によれば、この「喜」は、広本・抱本ともに「善」とすると言う。後出の『明英宗実録』巻275天順元年2月癸卯条からも、「善」が正しいと推測される。
- xvii この景泰7年の輔教王冊立使節団は、民を害したことによって「脚力等項」を「減半」されている。そのため、いったん京師に戻ったのではないか。表の下欄にあるように、天順元年9月辛巳条に、同じく「葛蔵」を正使とし、「桑加巴」を副使とする輔教王冊立使節が送られたとあるから、ここであらためて派遣されたものであろう。
- xviii 『明英宗実録』巻303天順3年5月庚寅条の「烏思蔵等処番僧桑加蔵卜」と同一人物である可能性がある。そうであるとすれば、一年以内の朝貢者であるため、ここで言う留京僧の基準から外れることになる。しかし当該10月丁巳条における彼の陞叙が、明らかに留京僧であった「筍実巴」らと並記されているため、いま留京僧として採る。
- xix この「鎖南領占」は、これ以前、『明英宗実録』巻303天順3年5月庚寅条・『同前』巻336天順6年正月丁巳条にも記されるが、これら二件は岷州衛崇教寺僧としての朝貢・回賜の記事であるため、除外する。
- xx おそらくアーチャーリヤ（阿闍梨）であって固有名詞ではないが、この前後に個人名が記されていないため、この語のみを記す。
- xxi 以下、本件を含め、この「領占竹」として合計九件を採っている。慈恩寺に所属していたことが後出する。ただし四川光相寺に遠ざけられていた時期（『明孝宗実録』巻80弘治6年9月己亥条・『同前』同年同月癸卯条・『同前』同年同月戊午条・『同前』巻81弘治6年10月辛未条）があり、これらについては、除外した。なお、『明憲宗実録』巻258成化20年11月丙戌条・『同前』巻284成化22年11月丙午条の「領占竹」は、能仁寺に所属していた別人である。
- xxii この「官著堅参」は、「明憲宗実録巻一百三十六校勘記」にしたがった。
- xxiii 真覚寺は順天府西直門の西四里に、宣宗によって建てられた（何孝榮[2007年]174-175頁）。よって厳密には城外の寺であり、また寺僧もチベット人僧ではなくインド人僧であるようである。しかし下欄にあるように、この寺の僧の名に「刺麻」を冠するなど、政権側の対応がチベット仏教僧に対するそれと同等であるため、これを採ることとする。

- xxiv 『明憲宗実録』 卷196成化15年閏10月丙子条などに隆善護国寺の「著^ル領占」として既出する者とおそらく同一人物。『同前』 卷283成化22年10月庚辰条に同寺の「著^ル領占^{マフ}朶而只巴」として後出。
- xxv 「大崇教寺」はチベット仏教僧を擁する岷州衛の仏寺である（たとえば『明憲宗実録』 卷201成化16年3月癸卯条）が、京師の仏寺と「兼住」していると解して、以下の「綽^{マフ}蔵領占」「端竹札失」「端竹羅卓」の三人を留京僧として採る。このうち「端竹羅卓」は隆善護国寺に滞在していることが『明憲宗実録』 卷258成化20年11月丙戌条・『同前』 卷276成化22年3月庚戌条から判明するから、やはり三人ともに留京者と見てよいであろう。
- xxvi 「明憲宗実録卷二百八十四校勘記」によれば、抱本がこれを「占」とすると言う。おそらく「占」が正しいだろう。
- xxvii 「明憲宗実録卷二百九十校勘記」によれば、この「利」を、抱本は「和」と記すと言う。
- xxviii 年次のうえで大きな隔たりがあるが、『明英宗実録』 卷33正統2年8月壬戌条・『明憲宗実録』 卷53成化4年4月庚戌条・『明孝宗実録』 卷2成化23年9月丁未条などを順次たどると、この弘治9年正月壬午条まで同一人物の経歴としてつながる可能性がある。
- xxix この「大国師」は、「明孝宗実録卷一百八十一校勘記」にしたがった。下欄同箇所も同じ。
- xxx この「朶而只巴」は、「明孝宗実録卷一百八十二校勘記」にしたがった。
- xxxi この「像」は、「明孝宗実録卷一百八十八校勘記」にしたがった。
- xxxii 近年「大慶法王」号については、武宗がみずから名乗るとともに、岷州僧のリンチェンベルデンにも同号を与えたとする大慶法王二人説を唱える研究者が少なくない（李志明・索南旺母[2022年]110頁）。しかし、大慶法王はあくまでも武宗自身のみと考えるべきであろう。後出正徳8年2月辛亥条の事案における礼部の困惑も、そのことをよく反映している。
- xxxiii 「明武宗実録卷六十五校勘記」によれば、広本・抱本はこれを「^{マフ}竹革了」と記すと言う。
- xxxiv この「領占^{マフ}箇巴」は、「明世宗実録卷四校勘記」にしたがった。
- xxxv 当該条では、十方庵を「広寧門外」と記している。したがって厳密には順天府城内の仏寺ではないが、いまこれを採る。

〈表 2〉 各実録に採録された個々の留京チベット仏教僧に関する勅命記事：集計

実録 (年数)	A型～H型 その勅命の対象となったチベット仏教僧のべ人数								A～E 計	F～H 計	A～H 総計
	A	B	C	D	E	F	G	H			
『太祖』 (31)	0	0	0	0	0	1/0.03	1/0.03	0	0	2/0.06	2 /0.06
『太宗』 (23)	3 /0.13	0	1 /0.04	0	0	0	0	2/0.09	4 /0.17	2/0.09	6 /0.26
『仁宗』 (2)	0	0	0	0	0	0	0	1/0.50	0	1/0.50	1 /0.50
『宣宗』 (11)	0	6 /0.55	1 /0.09	0	0	0	1/0.09	3/0.27	7 /0.64	4/0.36	11 /1.00
『英宗』 正統(15)	3 /0.20	1 /0.07	2 /0.13	0	4 /0.27	0	2/0.13 ▽2/0.13	21/1.40	10 /0.67	23/1.53 ▽ 2/0.13	33 /2.20
『英宗』 景泰(9)	2 /0.22	0	0	1 /0.11	0	1/0.11	0	74/8.22 ○ 13/1.44	3 /0.33	75/8.33 ○ 13/1.44	78 /8.67
『英宗』 天順(8)	4 /0.50	0	0	0	2 /0.25	1/0.13	2/0.25 ▽1/0.13	11/1.38	6 /0.75	14/1.75 ▽ 1/0.13	20 /2.50
『憲宗』 (24)	4 /0.17	2 /0.08	1 /0.04	1 /0.04	1 /0.04	1/0.04	8/0.33 ▽1/0.04 ▼ 1/0.04	237/9.88 ○ 1/0.04 ▽ 2/0.08 ▼176/7.33	9 /0.38	246/10.25 ○ 1/0.04 ▽ 3/0.13 ▼177/7.38	255 /10.63
『孝宗』 (19)	0	0	0	8 /0.42	2 /0.11	5/0.26 ▽3/0.16	3/0.16 ▽3/0.16	9/0.47	10 /0.53	17/0.89 ▽ 6/0.32 ▼ 7/0.37	27 /1.42
『武宗』 (17)	5 /0.29	0	0	1 /0.06	2 /0.12	1/0.06	7/0.41 ▽3/0.18	49/2.88 ▼ 10/0.59	8 /0.47	57/3.35 ▽ 3/0.18 ▼ 10/0.59	65 /3.82
『世宗』 (46)	1 /0.02	0	1 /0.02	0	0	0	0	0	2 /0.04	0	2 /0.04
『穆宗』 (7)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
『神宗』 (49)	7 /0.14	0	0	0	0	0	0	0	7 /0.14	0	7 /0.14
『光宗』 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
『熹宗』 (8)	2 /0.25	0	0	0	0	1/0.13	0	0	2 /0.25	1/0.13	3 /0.38
計	31 人	9 人	6 人	11 人	11 人	11 人	24 人	407 人	68 人	442 人	510 人

【凡例】

※ (年数)——各実録がカバーする年数。ただし『明太祖実録』は洪武元年から洪武 31 年。『明太宗実録』は成祖が登位した「洪武三十五年」(＝建文 4 年)以降。「景泰」は代宗統治の足かけ年数(正統 14 年 9 月～景泰 8 年正月)。「天順」は天順元年(＝景泰 8 年)以降。

※ /小数——その記事の対象となった個人名所載留京チベット仏教僧のべ人数の年平均値。小数点以下 3 桁めを四捨五入。

※ F・G・H の○▽▼——各項目の対象人数総数のうち、○▽▼それぞれの人数。

文献表

【目次】

新宮学

王瑞来

乙坂智子

「二〇〇四年」『北京遷都の研究——近世中国の首都移転』東京、汲古書院

「二〇〇一年」『宋代の皇帝権力と士大夫政治』東京、汲古書院

「一九九八年」『蛮夷の王、胡羯の僧——元・明代皇帝権力は朝鮮・チベットからの入朝者に何を託したか』（平成八・九・一〇年度、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）報告書）

「二〇二〇年」『永楽五年靈谷寺普度大斎と呈祥詩文——胡広撰「聖孝瑞応歌」考』（『横浜市立大学論叢』人文科学系列、七一巻三号、一四九—二一八頁）

「二〇二二年」『永楽五年「御製靈谷寺塔影記」再考——普遍的神聖存在としての君主像とチベット仏教』（『社会文化史学』六六号、一—二二頁）

「二〇一三年」『永楽五年靈谷寺普度大斎称賀詩二首——王偁「蔣山法会瑞応詩」と王褒「聖孝瑞応」』（『横浜市立大学論叢』人文科学系列、七四巻一号、三九九—四三一頁）

「一九八六年」『中世チベット史研究』京都、同朋舎出版

「二〇一五年」『実録と檔案の間——明代万曆初期の事例から』（『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）、八二号、三二—六〇頁）

「一九七九年」『明代文化史研究』京都、同朋舎

「一九六八年」『中国政治制度の研究——内閣制度の起源と発展』京都、京都大学文学部内東洋史研究会

問野潜龍

山本隆義

「二〇〇七年A」『明武宗信奉藏伝仏教史実考述』（『西藏研究』二〇〇七年二期、二三—三〇頁）

「二〇〇七年B」『明宣宗与藏伝仏教関係考述』（『中国蔵学』二〇〇七年三期、一四—一九頁・一〇〇頁）

「二〇〇五年」『明代留京僧師の藏伝仏教僧人』（『中国蔵学』二〇〇五年二期、五九—六六頁）

「二〇〇六年」『明代宦官与藏伝仏教』（『西北師大学報』社会科学版、四三巻一号、六四—六九頁）

杜常順

才讓

【中文】

才讓

杜常順

才讓

顧祖成・王觀容・瓊華・李垣垣・呂煥祥・彭遐熙・侯躍生編「一九八二年・一九八五年」『明實錄藏族史料』(第一集・第二集・第三集) 許昌、西藏人民出版社

閔文堯・顏弘文「一九九五年」『明代政治制度研究』北京、中国社会科学出版社

何孝榮「二〇〇五年」『明代皇帝崇奉藏傳佛教淺析』(『中国史研究』二〇〇五年四期、一一九—一三七頁)

——「二〇〇七年」『明代北京佛教寺院修建研究』上・下、天津、南開大学出版社

黃顯「一九八七年」『北京法海寺藏族助緣僧人考』(『拉薩藏學討論會文選』西藏、西藏人民出版社、五九—八二頁)

李洵「二〇〇九年」『大明帝國的夢魘——正德皇帝九講』北京、中央廣播電視大学出版社

李志明・索南旺姆「二〇二二年」『藏文《御制重修大隆善護國寺志碑》』(『中国藏學』二〇二二年二期、九八—一二三頁)

沈衛榮「二〇一〇年」『西藏歷史和佛教的語文學研究』上海、上海古籍出版社

王貴「一九九一年」『藏族人名研究』北京、民族出版社

王其渠「一九八九年」『明代內閣制度史』北京、中華書局

謝貴安「二〇一三年」『明實錄研究』上海、上海古籍出版社

熊文彬「二〇二〇年」『龍椅與法座——明代漢藏藝術交流史』北京、中国藏學出版社

陰海燕「二〇一九年」『明代藏傳佛教政策的轉換與演進』(『西藏研究』二〇一九年三期、五八—六九頁)

張明林「二〇一一年」『頑童治國——明武宗正德』北京、西苑出版社

趙改萍「二〇〇九年」『元明時期藏傳佛教在內地的發展及影響』北京、中国社会科学出版社

【歐文】

Shen Weirong (沈衛榮) [2017] "Ming Chinese Translations of Tibetan Tantric Buddhist Texts and the Buddhist Saṃgha of the Western Regions in Beijing." In edited by Yael Bentor, Meir Shahar, *Chinese and Tibetan Esoteric Buddhism*, Leiden, Boston: Brill, pp. 263–299.

